

一般国道8号
柏崎バイパス関係発掘調査報告書V

千古作遺跡II

2012

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道8号
柏崎バイパス関係発掘調査報告書V

ち　ご　づくり
千古作遺跡Ⅱ

2012

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

現在の柏崎市域の国道8号は、周辺の市街化や商業施設の急増と交通需要の増加に伴い、慢性的な交通混雑が発生し、特に夏季の交通渋滞は沿道住民にとって深刻な問題となっています。一般国道8号柏崎バイパスの建設事業は、このような問題を解決し、広域地域との交流の促進、交通の円滑化、都市機能の活性化などを目的に計画されました。

新潟県と柏崎市教育委員会では、柏崎バイパスの工事に先立ち道路法線に係る遺跡の発掘調査に1996（平成8）年から取り組んで来ました。柏崎平野を見下ろす西側の丘陵上には、縄文時代中期から後期の大集落剣野B遺跡があります。また、平野にある古代の遺跡では半田一丁目で箕輪遺跡を調査し、都と地方を結ぶ官道に設けられた駅に関連する木簡を発見しました。平安時代の延喜式に載る三鶴駅^{かしこえき}が遺跡近くにあったと思われます。鶴川右岸の下沖北遺跡は、整然と並ぶ建物や九州産の滑石製石鍋、茶臼、輸入陶磁器やかわらけの大量出土など13世紀から14世紀の有力者の生活を垣間見ることができます。

柏崎平野の北部を流れる鮒石川左岸では、東原町遺跡で一万枚余の渡来銭が入った14世紀前半の珠洲焼壺が見つかりました。交易に関わる有力者の遺跡と見られます。

2011（平成23）年度は鶴川沿いにある千古作遺跡の2度目の発掘調査を行い、掘立柱建物跡や中世の陶磁器が出土しました。今回の成果が、2008（平成20）年度の一度目の調査や鶴川対岸の下沖北遺跡とも対比して、中世の柏崎の暮らしの一部を知る情報になることを期待します。

最後にこの発掘調査に対し多大な御理解と御協力をいただいた柏崎市教育委員会、都市整備部八号バイパス事業室、並びに地元の方々、また、発掘調査から報告書の作成に至るまで格別な御配慮をいただいた国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所に対して厚く御礼を申し上げます。

2012年3月

新潟県教育委員会

教育長 武藤 克己

例　　言

- 1 本報告書は、新潟県柏崎市大字剣野町字千古作 288-3 ほかに所在する千古作遺跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は一般国道 8 号柏崎バイパスの建設に伴い、国土交通省から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したものである。
- 3 発掘調査は、県教委が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼した。
- 4 埋文事業団は、掘削作業等を株式会社古田組に委託して発掘調査を 2011（平成 23）年度に実施した。
- 5 千古作遺跡の発掘調査は 2008（平成 20）年度に続き 2 回目である。
- 6 出土遺物及び調査に係る各種資料は、すべて県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の注記は「11 チゴ」とし、出土地点や層位などを続けて記した。
- 7 本書に掲載した遺物番号はすべて通し番号とし、本文及び挿図・遺物觀察表・図面図版・写真図版の番号は一致する。
- 8 引用・参考文献は、著者及び発行年（西暦）を中心に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 9 作成した図版のうち、既成の地図を使用した場合は、それぞれにその出典を記した。
- 10 本書で示す方位は、すべて真北である。
- 11 道構断面図のトレース及び各種図版作成・編集は、有限会社天田安平商店に委託し、完成データ（P D F）を印刷業者へ入稿して印刷した。遺物写真是、デジタル一眼レフカメラで撮影し、デジタル化した道構写真と合わせて編集を行った。
- 12 本書の執筆は、相羽重徳（株式会社古田組　遺跡調査研究室主任調査員）、田海義正（新潟県埋蔵文化財調査事業団　課長代理）があたり、編集は相羽が担当した。執筆分担は以下のとおりである。

第 1 章…田海　　第 II ~ VI 章…相羽
(敬称略、五十音順)
- 13 発掘調査から本書に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力を得た。厚く御礼申し上げる。

伊藤 啓雄　品田 高志　柏崎市教育委員会

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査経過	2
A 試掘確認調査	2
B 本発掘調査	3
1) 調査・整理の体制	3
2) 発掘調査経過	3
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	4
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	5
A 鶴川流域の遺跡	5
B 文献からみた古代・中世の柏崎	7
1) 古代	7
2) 中世	7
第Ⅲ章 調査の概要	9
1 2008・2011年度の発掘調査地点	9
2 グリッドの設定	9
3 基本層序	9
4 周辺の地形	12
第Ⅳ章 遺構	13
1 概要	13
2 記載の方法	13
3 各説	13
A 掘立柱建物	13
B 溝	14
C 土坑・性格不明遺構・ピット	14
第Ⅴ章 遺物	15
1 概要	15
2 記載の方法	16
3 各説	16
A 中・近世の土器・陶磁器	16
B 繩文土器・古代の土器	17
C 木製品・鍛冶関連遺物・金属製品・石製品	17

第VI章 まとめ	18
1 出土遺物からみた千古作遺跡の消長	18
2 遺跡周辺の微地形と土地利用	19
 『要 約』	20
『引用・参考文献』	21
『観察表』	23

挿図目次

第1図 柏崎バイパスの法線と遺跡の位置	1	第6図 P201出土の礎盤(板)	14
第2図 遺跡範囲と試掘トレーニチの位置	2	第7図 遺物の重量分布図	15
第3図 周辺の遺跡分布図	6	第8図 出土陶磁器の組み合わせ	18
第4図 基本上層柱状図	11	第9図 千古作遺跡における検出遺構と土地利用	
第5図 字千古作土地更正図と調査区	12	のあり方(15世紀前後)	19

表目次

第1表 周辺の道路一覧表	6	第4表 ピット觀察表	14
第2表 鶴川流域近世村落の石高推移	8	第5表 層位別出土遺物数量表(破片数)	15
第3表 S B201柱穴觀察表	13		

図版目次

〔図面図版〕

- 図版1 調査範囲と周辺の地形
 図版2 遺構全体図
 図版3 平成23年度調査区遺構全体図と基本層序
 図版4 遺構分割図(1)
 図版5 遺構分割図(2)
 図版6 遺物

〔写真図版〕

- 図版7 遺跡遠景・調査区全景
 図版8 遺跡遠景・基本層序・完層・遺物出土状況
 図版9 遺構(1)
 図版10 遺構(2)
 図版11 遺物

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯

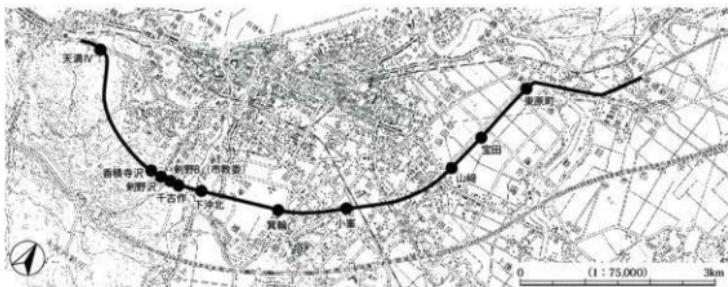
今回の千古作遺跡の発掘調査は、2008（平成20）年度に続く2度目の調査である。調査に至る経緯は、前回の調査報告書〔石川ほか2011〕から多くを転載した。

一般国道8号柏崎バイパスは、柏崎市長崎を起点に同市「鯨波」に至る延長11.0kmの幹線道路である。交通混雑の解消や都市機能の活性化などを目的に1987年度に事業化された。1991年度から用地買収、1993年度から工事に着手して整備が進められている。これを受け、建設省（現国土交通省、以下、国交省）と県教委との間で埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が本格化した。

柏崎市元城町字宮川（横山川）から剣野字香積寺沢間の分布調査は、県教委から委託を受けた埋文事業団が2000年12月に実施した。周知遺跡である剣野B遺跡・剣野沢遺跡・香積寺沢遺跡が存在するほか、水田地帯の広範囲で平安時代から中世の遺物が採集できたことから、ほぼ全域で試掘確認調査が必要である旨を県教委に報告した。

千古作遺跡に係る試掘調査は、埋文事業団が2003年8月に実施した。中世の遺物とその時期の可能性がある遺構を検出し、字名から千古作遺跡として新規登録した。この時点での本発掘調査（以下、本発掘）必要面積は3,020m²である。1度目の本発掘は2008年4月から7月まで、橋脚と工事用地盤改良範囲の850m²を対象に行った。その後、国交省から橋脚以外の工事計画が伝えられた〔平成21年度埋蔵文化財に関する調整会議・2009年10月〕。当初は2010年度に1,250m²、2011年度以降さらに1,100m²の本発掘が必要とされた。2010年7月の協議で工事計画を精査し、水路掘削部分の約280m²を調査対象に2011年度に2度目の本発掘調査を行うことになった。〔平成23年4月7日付け教文279号の2〕で県教委から理文事業団に本発掘の依頼があり、4月11日から発掘調査を開始した。

柏崎バイパス全体では、1995年から周知の箕輪遺跡周辺から試掘調査を開始し、1996年からは同遺跡の本発掘に着手した。これまでの試掘確認調査で把握した周知と新発見を合わせた11遺跡のうち、10遺跡の約104,000m²は現地調査を終了したが（第1図）、試掘調査未了区間や未発掘、未報告の遺跡も残る。



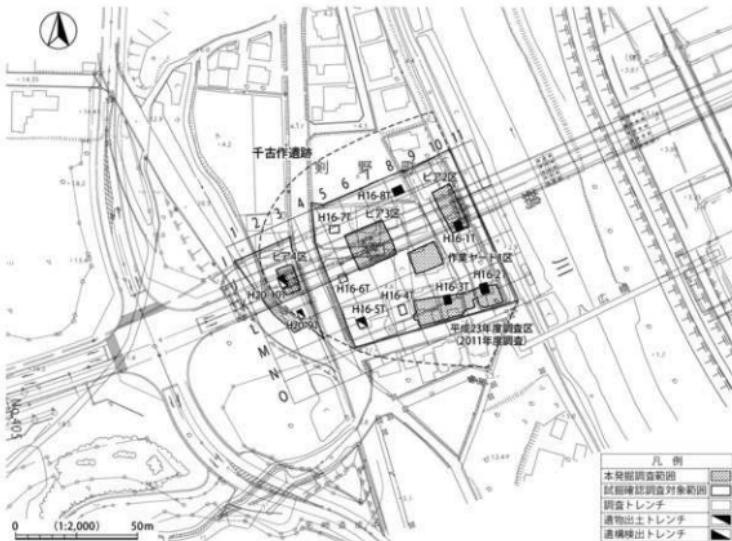
第1図 柏崎バイパスの法線と遺跡の位置
〔国土地理院「柏崎」「岡野町」1:50,000を縮小〕

2 調査経過

A 試掘確認調査

千古作遺跡に係る試掘調査は、2003年8月27・28日に実施し、柏崎バイパス用地約4,900m²を対象に約112m³を掘削した（第2図）。8か所の試掘坑（トレンチ 以下、T）を設定して調査したところ、H16-1 T・2 T・3 T・8 Tで遺構を検出した。また、5か所から土師質土器、珠洲焼、須恵器、磨石、錢貨、鉄滓が出土した。遺物から鶴川の対岸に位置する下沖北遺跡との関連が考えられ、3,020m²について本調査が必要と判断した。新発見遺跡であることから名字を付け千古作遺跡と呼ぶ。

2008年5月14日には、試掘未了であった西側の丘陵裾部730m²を対象にトレンチを2か所（H20-9 T・10 T）、約26m³を試掘した。遺構は検出できなかったが、古代から中世の遺物が出土した。遺跡の広がりを確認し、遺物が多く出土したH20-10 T周辺（第2図）について本調査が必要と判断し、該当するピア4区の80.5m²を発掘した。



第2図 遺跡範囲と試掘トレンチの位置

B 本発掘調査

1) 調査・整理の体制

調査期間	2011年4月11日～4月26日		
整理期間	2011年5月9日～2012年2月10日（他遺跡の発掘調査も併行した）		
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）		
調査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団		
総括	木村正昭（財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）		
管理	今井直（同）	同	秘務課長
庶務	伊藤忍（同）	同	班長
指導	北村亮（同）	同	調査課長
調査担当	田海義正（同）	同	課長代理
支援組織	株式会社古田組		
	現場代理人 竹内一喜		
調査員	藤田登 相羽重徳 建部真也		
整理作業員	安達鉄雄 風間 梢 小池美奈子 渡部明美		

整理作業は上越市柿崎区に所在する株式会社古田組遺跡調査研究室で行った。現地の地形測量及び遺構実測図製作・遺物実測図版組等の編集作業は有限会社天田安平商店に委託した。

2) 発掘調査経過

千古作遺跡の本発掘範囲は、柏崎市剣野町字千古作 259-5～8（宅地）、288-1（公衆用道路）、288-3（宅地）である。法線の南際に沿って幅約 7.1 m・長さ約 40 m の 331 m²を対象とした（第2図）。対象地に造られる構造物は、バイパスが通る西側の丘陵からの雨水を鶴川に排水するための水路である。

現地調査は 2011 年 4 月 11 日から器材を搬入し、調査範囲設定、騒音・振動計を設置した後、重機による表土削りに入った。遺物包含層も遺物が極めて少ないことが分かり、重機によって慎重に掘削した。14 日には宅地客土と旧水田耕作土、遺物包含層の除去が終了し、掘削作業開始から続けていた層位確認も済み、2008 年度発掘調査との土層も対比できた。遺構検出面が地表から 2.5 m から 2.8 m と低いため、調査区の法面尻に幅、深さとも約 20 cm の排水溝を切り回し、北側に設置した暗渠排水に集水した。18 日には 7 N 区北西隅に集水槽を設置した。4 月 20 日に土層図作成、遺構検出作業も終盤に入った。21 日から遺構掘りに入り、25 日に遺構を完掘した。26 日に空中写真撮影、県教委文化行政課による終了確認。28 日には埋め戻しを完了した。なお、9 N・9 O 区には電柱の控え線があり、発掘出来なかった（図版 3・7・8）。この部分については、県教委から国交省長岡国道事務所長へ宛てた遺跡発掘調査の終了報告（「平成 23 年 6 月 6 日付け 教文第 194 号」）に、支障物件による未調査部分の工事立会が必要との特記事項が添えられた。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

柏崎平野の地勢 柏崎平野は、主要河川である鶴川と鮎石川及びその支流の別山川によって形成された臨海沖積平野である。その南と東、西の三方は「刈羽三山」を頂点とする山地や東頸城丘陵によって囲まれている。「刈羽三山」とは米山（標高 992.5 m）、黒姫山（889.4 m）、八石山（518 m）を指し、米山・黒姫山山頂付近は大起伏山地に地形区分され、頸城方面との分水嶺をなす。こうした山地・丘陵の縁辺には、沖積地や一部日本海に接して中・高位段丘面が局地的な広がりを見せる。加えて、日本海に接する沿岸部には荒浜・柏崎砂丘が発達し、その後背には湿地性の沖積地が展開する〔鈴木ほか 1988・1989〕。

こうした柏崎平野周辺の地形的特徴は、平野を北流する鶴川・鮎石川によって東部・中央部・西部に三分される。東部は鮎石川以東の地域に相当し、丘陵や沖積地・砂丘が発達している。刈羽・三島丘陵などの丘陵地帯と別山川・長鳥川中城の沖積地、さらには日本海岸沿の砂丘が広く展開し、その軸はいずれも北北東～南南西方向を示している。こうした地形的特徴は新第三系以降の地質構造を反映したもので、褶曲構造の向斜・背斜方向と一致している〔鈴木ほか前掲、大野ほか 1990〕。

中央部は鶴川・鮎石川流域に沿って黒姫山地や丘陵が南北方向に展開し、その縁辺では中位段丘地帯の発達が顕著である。中位段丘面は著しく樹枝状に開析され鶴川・鮎石川が生成した沖積地に接している。中央部以西では地形の軸が東部に比べて南北方向にずれているが、それは新第三系以降の地質構造の褶曲区の違いに由来するものと推測されている〔大野ほか前掲〕。

西部は鶴川左岸一帯を指し、米山から続く山地・丘陵が発達している。当地域では、米山山地が海岸に達して断崖をなし、その東側では狭小な中・高位段丘面を形成している。砂丘や沖積地の形成に乏しい地域であり、広範囲に発達した沖積地や砂丘が展開する東部や中央部とは対照的な様相を示している。

鶴川流域の地形と遺跡の位置 千古作遺跡が立地する鶴川流域は、上述のような米山山地や丘陵が発達した柏崎平野西部にある。鶴川流域左岸に相当する米山丘陵では、小規模な開析が進行し、南北方向の狭隘な樹枝谷が深く入り込んでいる。一方、右岸は中・高位段丘（安田丘陵）が展開するとともに、左岸とは対照的に強い湿地性を示す沖積地が広範な広がりを見せており、現在ではわずかな湖沼を残すのみとなっているが、「鏡ヶ池」なる湖沼の存在が伝承されている区域である。

鶴川は流域面積 108.7km^2 、流路全長 24.6km の二級河川で、柏崎市南部の尾神岳に源を発する。その下流では蛇行を繰り返し、小規模な自然堤防を発達させている。かつてはより複雑な蛇行が見られ、大雨の都度氾濫する水害の歴史を繰り返してきた。その下流域に立地する千古作遺跡やその対岸の下沖北遺跡周辺などにも旧流路の残痕が地形図などから観察できる〔品田 1995 b、高橋ほか 2003〕。このような鶴川流域の氾濫原では、自然堤防などの微高地に古代・中世の遺跡が立地する。

千古作遺跡はこの鶴川下流域の左岸に立地し、鶴川の河口から 2.5km ほど上流の剣野丘陵裾部の微高地にある。遺跡西方の中位段丘上には柏崎市指定史跡・剣野山縄文遺跡群（剣野 B 遺跡など）が展開し、鶴川を挟んだ対岸には中世を主体とする下沖北遺跡〔高橋ほか前掲、山崎ほか 2005〕がある。当遺跡は下沖北遺跡とともに鶴川に沿って形成された遺跡である。

2 歴史的環境

A 鶴川流域の遺跡

縄文時代 鶴川流域を中心とした柏崎平野南西部では、既に前期後半以降を主体とする多数の遺跡が周知化されている。縄文時代草創期・早期の遺跡は、現段階では極めて少なく、その様相は明らかでないが、大原遺跡(46)で草創期と考えられる局部磨製石盤形石斧が採取されている〔宇佐見 1987〕。

前期の遺跡には、剣野A遺跡(8)、大宮遺跡(35)、尻振坂遺跡(38)、辻の内遺跡(45)などがあり、特に前期後半以降の遺跡形成が明瞭である。大宮遺跡〔中野 1998〕は該期の中核的集落と目される。

中期は柏崎平野において遺跡数が増加する時期であり、中期初頭における土器型式の標準遺跡となった剣野E遺跡(3)や剣野B遺跡(9)がある。ほかに藤橋東遺跡群(41)の京ヶ峰遺跡や、尻振坂遺跡(38)、大沢A遺跡(34)、雨池遺跡(37)、辻の内遺跡(45)などが分布している。このうち剣野B遺跡は、近年の発掘調査によって中期前葉の拠点的環(弧)状集落の存在が明らかとなつた〔品田ほか2011〕。

後・晚期の遺跡は、剣野C遺跡(12)、剣野B遺跡(9)、剣野沢遺跡(10)などがある。前述した中期前葉の中核的集落である剣野B遺跡では、後期後葉以降再び環(弧)状集落が形成される〔品田ほか前掲〕。また、十三本塚北遺跡(69)でも後期前葉の環状集落の存在が明らかにされている〔品田・平吹 2001〕。

鶴川流域では生業関連の遺跡も分布する。藤橋東遺跡群(41)の呑作G遺跡〔品田 1997〕と呑作A遺跡・京ヶ峰遺跡〔品田 1995 a〕、千古塚遺跡(48)〔品田 1990〕などで階穴状遺構が多数検出されている。

こうした鶴川流域周辺の縄文時代の遺跡立地は、大部分が中位段丘や丘陵上の平坦面に分布するが、谷間沖積地上の剣野沢遺跡(後期後葉)〔中野 1995、石川 2009〕や、自然堤防上の可能性が指摘されている高畠遺跡(後期中葉)〔品田 1990〕などがあり、後期中葉以降には沖積地への展開が認められる。

弥生・古墳時代 柏崎平野東部の吉井周辺では、弥生時代中期後半の国指定史跡・下谷地遺跡〔高橋ほか 1979〕など複数の遺跡が知られているが、鶴川周辺では、該期の遺跡は少ない。

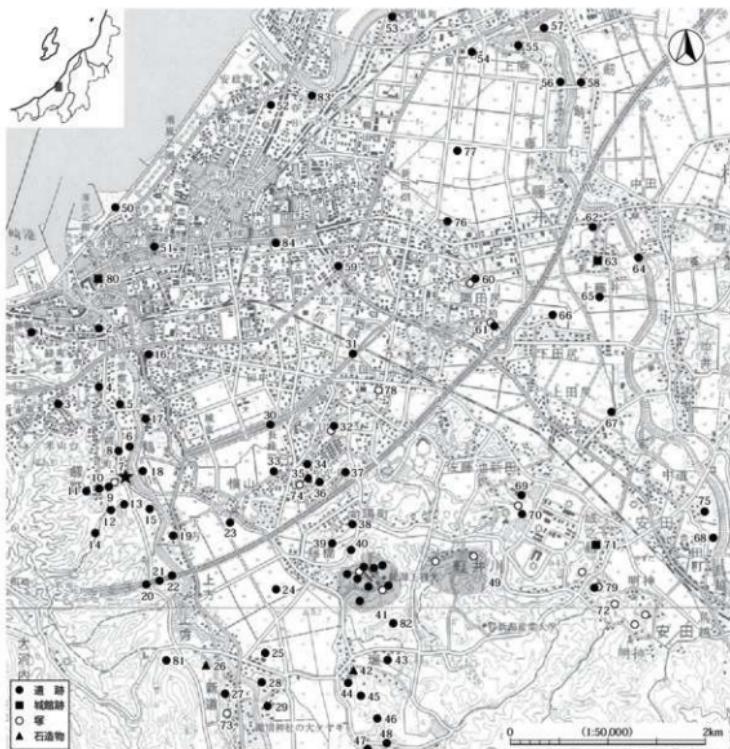
鶴川周辺の弥生時代の遺跡には、剣野A遺跡(8)、箕輪遺跡(30)、鶴巻田遺跡(22)などがあり、近年報告された箕輪遺跡では中期後半の遺構が検出されたほか、土器や勾玉などの玉作関連遺物が出土している〔小野塚ほか 2002〕。ほかは後期の遺物が採取若しくは少量出土しているにとどまる。

古墳時代では、三島神社遺跡(5)や琵琶島城遺跡(17)があるが詳細は明らかでない。

古代 古代の遺跡は、古墳時代とは対照的に遺跡数が増加し、9世紀代を中心とする平安時代の遺跡が数多く存在している。発掘調査も、下沖北遺跡(18)、鶴巻田遺跡(22)、前掛り遺跡(25)、箕輪遺跡(30)などで実施され、古代集落の様相が明らかにされつつある。このうち箕輪遺跡では、これまで柏崎平野では少数であった奈良時代の遺物とともに、「駅家村」の記述がある木簡や木製錐などが出土したことから、延喜式の記載に見える「三船駅」が周辺に存在する可能性が濃厚となった〔岡田ほか 2000〕。

また、鶴川右岸の丘陵地帯では、雨池古窯(37)〔品田ほか 2000〕、藤橋東遺跡群(41)〔品田 1995 a〕、輕井川南遺跡群(49)〔中野 2008〕などが調査され、須恵器の窯跡や大規模な製鉄関連遺跡が展開していることが明らかとなった。鶴川左岸の丘陵地帯では剣野B遺跡(9)で大量の製鉄関連遺物とともに、鍛冶工房が検出されている〔品田ほか 2011〕。また、剣野水上遺跡(14)でも遺物が散在し、鶴巻田遺跡(22)では炉内渣が多数出土している〔藤巻 1988〕。

中世 中世の遺跡は、剣野沢遺跡(10)、下沖北遺跡(18)、鶴巻田遺跡(22)などがあり、これら



第3図 周辺の遺跡分布図

〔国土地理院「柏崎」越後守代〕2007)

%	遺跡名	時期	%	遺跡名	時期	%	遺跡名	時期	%	遺跡名	時期
1	赤堀	縄文	22	鶴巣田	縄文・古墳・中世	42	堀の輪周防	中世	63	藤川城跡	古代・中世・近世
2	大丸保塁	古代・中世	23	新井田	古代・中世	43	望の山	古代・中世	64	田野	縄文・古墳・中世
3	野野子	縄文(中州)	23	字原	古代・中世	44	原	縄文	65	田畠	古代・中世
4	御野子	縄文・古代・中世	24	川原	古代	45	辻の内	縄文	66	不道寺	古代・中世
5	五郎神社	古墳・古代	25	高瀬	宇治・中世	46	大原	縄文	67	大牧田	中世
6	古跡	縄文・古代	26	細川山の古墳群	中世	47	南下御堂原	中世	68	門田	中世
7	千吉作	中世	27	細川山	古代・中世	48	千古原	縄文・中世	69	上三本塚北	縄文(後削)
8	御野A	縄文・先史	28	利根	古代	49	軒原山(南側)群	古代・(製鉄遺跡)	70	十(五)原・一本塚	縄文・平明(原)
9	御野B	縄文・引連山・赤坂山	29	小原	中世	50	銀原	縄文・先史・古墳	71	安田城跡	中世
10	御野C	縄文・古代・中世	31	高輪	古代・中世	51	柳原町	中・近世	72	長者園	不明(原)
11	杏幡寺跡	縄文・古代・中世	32	半田一ツ塚	縄文・古墳(原)	53	須崎	縄文・先史・古代	73	越少山(越塚)	中世
12	御野C	縄文(中州)	33	田原	古代	54	東原町	古代・中世	75	中道	古代・中世
13	御野D	縄文	34	大原A	縄文・中期・平安	55	上原	古代・中世	76	山崎	古代・中世
14	御野水土	劉源周防	35	大穴	縄文(高原)・古代	56	埴原町	中世	77	宝田	古代
15	下淨	古代	36	大原B	古代(製鉄遺跡)	57	舟田	古墳・古代・中世	78	平田の原跡	中世・近世
16	御野	中世	37	高輪・南池古窯	縄文・平安	58	柳下川原	古墳・古代	79	上原川田	縄文
17	御野船越	古墳・古代・中世	38	細川原	縄文・(中州)	59	森森	古墳	80	利根町	不明
18	下淨光	平安・中世	39	藤原山	古代	60	田原山遺跡群	(仏龕)	81	一本松	古代・中世
19	御野船	中世	40	藤崎	縄文	61	小坂石	中世(中世遺跡)	82	堀・金クソ	古代(製鉄遺跡)
20	御田	縄文・古代・中世	41	藤崎山遺跡群	縄文・古代(製鉄遺跡)	62	田原山(後削)	中世	83	春日陣跡	近世
21	御山	縄文・古代・中世				63	田原山	中世	84	内谷	中世

第1表 周辺の遺跡一覧表

はいずれも 13 ~ 14 世紀を中心とするものである。このうち下沖北遺跡では方形区画内に掘立柱建物や井戸が集中する集落の様相が明らかにされ、道路状遺構や水田跡も検出されている〔高橋ほか 2003、山崎ほか 2005〕。鶴巻田遺跡でも井戸や貯蔵穴が検出された〔藤巻前掲〕。

鶴川流域ではこうした集落遺跡のほかに、千古塚遺跡（48）などで墳墓の調査事例がある。同遺跡では仮称「方形基壇墓」の検出があり、墓域が想定されている〔品田 1990〕。

15 世紀以降の遺跡は、上記の集落遺跡で遺物が散見されるほか、15 世紀後半～16 世紀の琵琶島城（17）〔中野 2003〕や柏崎町遺跡（51）〔品田ほか 2001〕の調査事例がある。このうち、中世莊園の比角莊園にある柏崎町遺跡では、遺跡の所在する東本町が 15 世紀には既に開発が及び、17 世紀を画期として市街地の原型が形成されていく過程が明らかにされている。また、剣野 B 遺跡（9）では土坑墓からなる 15 世紀の墓地が検出されている〔品田ほか 2011〕。

こうした鶴川流域周辺における中世遺跡の立地は、13 ~ 14 世紀を主体とする集落遺跡が丘陵裾部や自然堤防などの冲積地に分布し、千古塚遺跡などの墳墓が中位段丘などの台地上に立地する傾向が指摘されている〔品田 1995 b〕。15 世紀以降は加えて、港や城館を中心とした町場形成が進行した様子がうかがえる。以上のほかに丘陵上には三諦寺や庚申塚経塚（73・74）が分布し、このうち三諦寺経塚の経文奥書には建仁 3（1203）年の年号が認められる〔金子 1987〕。

B 文献からみた古代・中世の柏崎

1) 古代

古代の鶴川流域 千古作遺跡が存在する柏崎平野一帯は、奈良・平安時代を通じて越後国に属していた。越後国は、当初、北陸地方と出羽の置賜郡や最上郡を含む広大な越国に括されていたが、7世紀末に三分割されて成立する。その後、越後国は大宝 2（702）年に越中国 4 郡（頸頭・古志・魚沼・蒲原）を編入（『続日本紀』）和銅 5（712）年の出羽国の分置（『続日本紀』）を経て、その国域が完成する〔山田 1986、米沢 1980〕。

越後国には延長 5（927）年に成立した『延喜神名式』によって頸頭、三嶋、魚沼、古志、蒲原、磐船、沼垂の 7 郡の存在が知られ、柏崎平野一帯は三嶋郡の領域であった可能性が高い。三嶋郡は古志郡から 9 世紀前葉に分置された可能性が指摘〔米沢前掲〕されており、9 世紀以前では当該地域は古志郡に属していたことが推測される。また、10 世紀前葉に成立した『倭名類聚抄』には、三嶋郡に三嶋、高家、多岐の 3 郷が記載され、その所在は三嶋郷が鶴川下流域、高家郷が長鳥川流域と鰐石川中流域、多岐郷が別山川上・中流域にそれぞれ比定されている〔金子 1990〕。したがって、千古作遺跡周辺は少なくとも 10 世紀前葉には三嶋郷の郷域にあったことが推測される。

三嶋駅と式内社 鶴川下流域には三嶋郡内の式内社である三嶋神社や鶴川神社が存在している。また該地は延喜式が記す北陸道の「三嶋駅」の所在地と目されているが、前述した箕輪遺跡の「駿家村」木簡などによってその周辺が有力候補地となった〔相沢・小林 2000、中 2003〕。加えて、該地を通過する北陸道の官道をめぐっては既に内陸をとる説があったが〔新沢 1970、金子前掲〕、その可能性が高くなった。

2) 中世

中世莊園の成立 11 世紀後半から 12 世紀にかけて和名抄郷が再編され、各地に莊園や郷・保を単位とする国衙領が成立した。柏崎平野一帯では、鶴河莊、佐橋莊、比角莊などの莊園や、原田保、赤田保などの国衙領の存在が知られている〔金子 1976〕。これらの莊園・国衙領の所在は、現状では鶴河莊などの

荘園を柏崎平野南部の鶴川・鮫石川流域に、原田保などの国衙領を主に北部の別山川流域に比定するのが定説化している。このうち千古作遺跡が位置する鶴川流域は、鶴河荘の荘域である可能性が高い。

鶴河荘は、『吾妻鏡』の文治2(1186)年『三箇國庄々未進注文』に佐橋荘、比角荘などとともに記され、11世紀後半から12世紀の院政期の成立が想定されている〔荻野1983〕。具体的な荘域は根拠となる文献に乏しいが、『上杉朝定寄進状』(順応4(1341)年)、『室町幕府奉行人連署奉書』(文龜元(1501)年のほか)、『妙法蓮華經奥書』(延仁3(1203)年)、『十一面觀音胎内墨書銘』(延文3(1358)年)、『岩井神社鵠口銘』(嘉吉2(1442)年)などによって、千古作遺跡周辺の鶴川流域(新道、上条など)のみならず、鮫石川中下流域の左岸地帯(安田、藤井、半田など)までを含むものと推測されている〔村山1990〕。ただし、観応元(1350)年『室町將軍足利義詮御教書』に「越後國比角庄袋條」とあり、「袋條」が千古作遺跡の北東約600mの鶴川右岸に位置する現元城町小字袋田付近と推定される〔村山前掲〕ことから、千古作遺跡周辺が比角荘に含まれる可能性もある。

鶴河荘の支配 鶴河荘は、鎌倉時代初期に前述の『三箇國庄々未進注文』によって、本家を前斎院(鳥羽上皇の女頃子内親王)、領家を前治部卿(藤原光隆)とする前斎院領であったとされる〔荻野前掲〕。南北朝時代には、上杉朝定が丹波国の安国寺(光福寺)に鶴河荘安田条上方を寄進して『上杉朝定寄進状』(順応4(1341)年)、安田条が安国寺領となったことが明らかにされている。しかしながら、既に近隣の佐橋荘南条の地頭職を安堵していた毛利氏は安国寺領であった同条に進出し、長期にわたる論争の結果、ついに鶴河荘安田条の地頭職を獲得し(『室町將軍足利義満下文』、康暦2(1380)年)、同地を本拠とする毛利安田氏として権勢を振るう〔山田1987、村山1990〕。

こうした、鶴河荘への安田氏の勢力拡大が進められる一方、南北朝時代の14世紀に越後国守護上杉氏とともに入部した宇佐美氏が鶴川下流域の琵琶嶋を本拠とした。さらに室町時代の15世紀ころには越後国守護上杉一門の上杉清方が入部し、鶴川中流域の上条を本拠として上条氏を称した〔山田前掲〕。

このように鶴河荘域は少なくとも南北朝時代以降、琵琶嶋の宇佐美氏、上条の上条上杉氏、安田の毛利安田氏らが本拠を構え、柏崎平野の中核的な領域を形成した。

戦国時代には、上述の鶴河荘の宇佐美、上条、安田氏も戦乱に巻き込まれ、永禄7(1564)年に宇佐美定満が死亡すると、琵琶嶋には琵琶嶋善次郎が入った。天正12(1584)年の御館の乱の終息後には、桐沢具繁が琵琶嶋と毛利北条氏の遺領(佐橋荘北条)をその所領としている〔村山1990〕。

近世剣野村と石高推移 千古作遺跡が所在する剣野周辺は、近世には剣野村と呼ばれ、18村からなる菊(刈)羽郡鏡郷に編成された。剣野村には琵琶嶋村の飛び地が多く、近世以降の琵琶嶋村が琵琶嶋城の名残を強く反映したものと説明されている〔新沢1990〕。明治42年の土地更正図にも琵琶嶋村の飛び地や剣野村との入り組んだ境界が示されている。

このような鶴河流域の近世剣野村やその周辺郷村の石高は、その多くで天和検地(1683年)まで増加し続けている〔新沢ほか1990〕(第2表)。近世郷村は近世初頭に進展し、元禄期にはほぼ完了する〔新沢1990〕が、これは17世紀後葉まで鶴川流域には開発の余地が残されていたことを示している。

村名	正保 (1645)	天和 (1683)	元禄 (1702)	天保 (1834)
鶴把島	1640	2386	2419	2449
剣野	129	190	206	303
下方	284	375	339	340
上方	510	380	380	381
新道	788	1347	1389	1396
貝瀬	54	76	76	80
黒崎	257	325	346	374
宮窪	513	341	592	613
横山	236	680	690	693
藤原	501	444	448	458
堀	450	513	513	515
南下	350	352	358	422
城川原	221	187	187	198
古町	130	155	165	173

〔新沢ほか1990〕を一部改変

第2表 鶴川流域近世村落の石高推移

第Ⅲ章 調査の概要

1 2008・2011年度の発掘調査地点（図版1・2）

2008（平成20）年度の発掘調査は、一般国道8号柏崎バイパス建設に伴い実施したもので、バイパスの橋脚部分3基と工事用作業ヤードを対象とした。調査面積（合計）は850m²である。調査区は工事用の名称を使用し、橋脚部分は「ピア2区」「ピア3区」「ピア4区」、工事用作業ヤードは「作業ヤード1区」と呼称した。

2011（平成23）年度の発掘調査は、柏崎バイパスに付随する水路の建設に伴い実施した。調査区の名称は、2008年度の調査区と区別するために「平成23年度調査区」と呼称した。平成23年度調査区は作業ヤード1区から南に約10m離れた地点に位置し、東西に約35m、南北に約9～10mを測り、調査面積は331m²である。一部、既設の電柱及び控え線が存在していたことから、これを避けて発掘を行ったため、調査区の形状は不整形となっている。

2 グリッドの設定（図版2）

グリッドは、千古作遺跡の2008年度調査で設定した方眼を延長して使用した。

グリッドの主軸方向は、バイパス法線のセンターラインである。センター杭No.400（X=149589.0152, Y=4453.3569）と杭No.395（X=149628.9595, Y=4545.0394）を結んだラインを主軸とした。そして、杭No.400で主軸と直交するように一定の間隔で方眼を組み、グリッドを設定した。主軸と直交するラインは、真北に対して23度32分31秒西偏している。

グリッドは大・小2種類からなる。大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを2m四方に25分割したものである。大グリッドは、杭No.400から主軸と直交するラインに沿って110m北の地点を起点とし、西から東へ向かい1・2・3…とアラビア数字を付した。また、起点から南へはA・B・C…とアルファベットを付した。小グリッドは北西隅を1、北東隅を5、南西隅を21、南東隅を25となるように番号を付し、大グリッドとの組み合わせで「7N18」などと表示した。

この方法により、平成23年度調査区は、7～10N・Oグリッドに含まれることになる。調査区内に位置し大グリッド交点である8O1の座標値はX=149589.472, Y=4529.513で、10O1の座標値はX=149597.460, Y=4547.849である。

なお、鶴川の対岸（右岸）に位置し、同じ柏崎バイパス法線上の下沖北遺跡の調査グリッドは、真北に対して21度51分58秒西偏しており、千古作遺跡の調査グリッドの延長線上にはない。

3 基本層序（第4図）

千古作遺跡は、鶴川と剣野丘陵に挟まれた幅約70mの間に立地する。現況は、かつての土地改良により0.8～2.2mの盛土がなされ平坦な宅地となっている。鶴川河床と調査区（9O）の現地表との比高は

約 6.5 m を測る。

千古作遺跡の基本層序は、2008 年度調査において設定され、2011 年度調査でも層名を踏襲した。

このうち遺物包含層は、中世以前の遺物を包含するⅢ層（層厚約 10cm）であり、その上位のⅡ層中（層厚約 30 ~ 40cm）には近世の遺物を含んでいる。Ⅲ層は、低地に当たるビア 4 区（A 地点）から平成 23 年度調査区西（D 地点）では比較的安定して堆積しているものの、微高地に当たる作業ヤード 1 区（E 地点）から平成 23 年度調査区東（G 地点）では極めて薄い若しくは存在していない。遺構検出面は V 層上面であるが、ビア 4 区では V 層が存在していないため IV 層上面で遺構検出を行った。V 層はビア 4 区を除き、比較的安定した堆積状況で、遺跡全面に厚く堆積する。V 層以下は無遺物層である。VI 層～X II 層は腐植土層と粘質土の互層となり、湿地性の堆積物と考えられる。これらの腐植土層は低地（ビア 4 区から平成 23 年度調査区西）にのみ存在する。

[基本層序]

○層 盛土

I 層 暗灰黄色（2.5 Y 5/2）～暗青灰色（5 B 3/1）粘質土 旧表土。平成 23 年度調査区では、上部に腐植土を含み、下部はややしまりがなく粘性を帯びている。

II 層 a ~ g 層に細分できる。近世以降の堆積層。平成 23 年度調査区では a・b・e 層を確認し、II a・b 層からは近世初頭以降の遺物、II e 層からは中世後期～近世初頭の遺物が出土した。

II a 層 灰黄色（2.5 Y 6/2）粘質土 炭化物粒子や灰黄色ブロックを少量含む。しまりが弱い。

II b 層 暗灰黄色（2.5 Y 5/2）粘質土 炭化物粒子や灰黄色ブロックを多量に含む。

II c 層 黄灰色（2.5 Y 4/1）粘質シルト 炭化物粒子や灰黄色ブロックをわずかに含む。

II d 層 暗青灰色（5 B 4/1）粘質土 炭化物粒子をわずかに含む。

II e 層 灰色（7.5 Y 6/1）粘質土 白色粒や炭化物粒子を少量含む。平成 23 年度調査区では色調がやや緑味を帯びている。

II f 層 灰色（5 Y 5/1）粘質土 白色粒や炭化物粒子を少量含み、植物遺体をわずかに含む。

II g 層 黄灰色（2.5 Y 4/1）粘質土 白色粒や炭化物粒子を少量含み、植物遺体を少量含む。

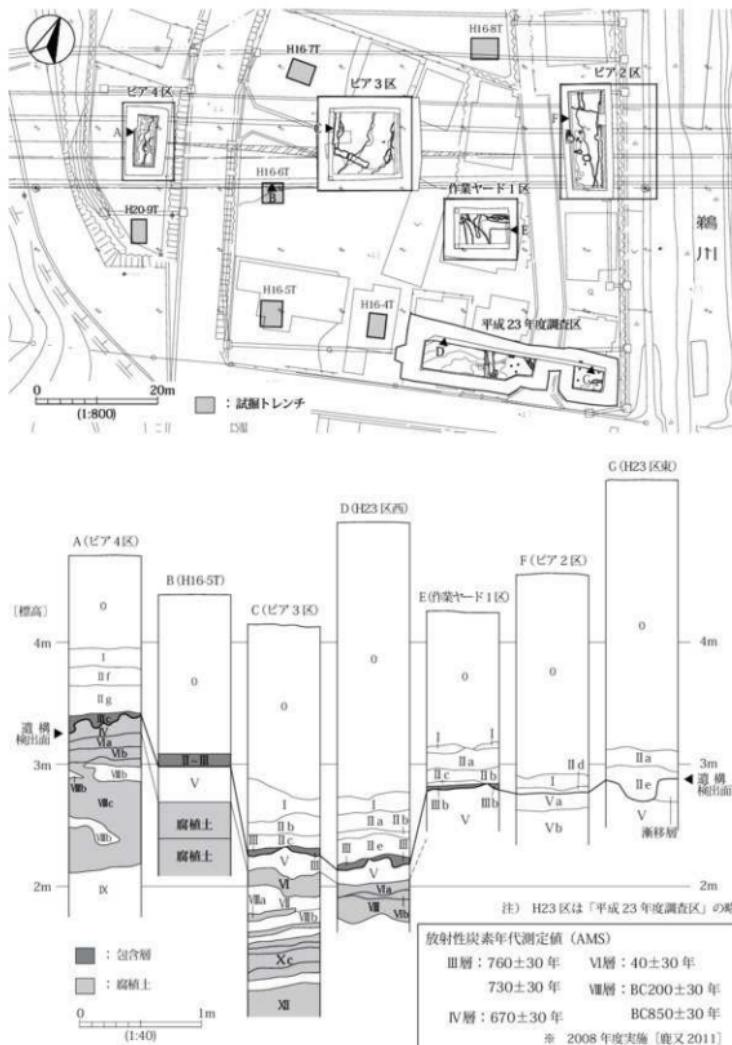
III 層 黒褐色（2.5 Y 3/1）粘質土 中世後期を中心とする遺物包含層である。2008 年度調査では色調・混入物の差異により a ~ c に細分している。平成 23 年度調査区では土層観察による分層はできなかったものの、層中に植物遺体を含まず、灰黄色粘土ブロックと炭化物粒子を含むことから III a 層に対応する可能性が高い。2008 年度に実施した放射性炭素年代測定値は A D 730 ± 30 年及び A D 760 ± 30 年〔鹿又 2011、以下同じ〕を示す。

IV 層 黒褐色（2.5 Y 3/1）腐植土 ビア 4 区でのみ確認された。部分的に粘土化しており、無遺物層。ビア 4 区の遺構検出面。放射性炭素年代測定値は A D 670 ± 30 年を示す。

V 層 灰黄色（2.5 Y 7/2）～緑灰色（10BG5/1）粘質土 遺構検出面。しまりが強く、粘性がある。混入物はきわめて少ない。調査区全域で比較的安定して堆積する。2008 年度調査では a ~ c に細分したが、平成 23 年度調査区では細分していない。

VI 層 黒褐色（2.5 Y 3/1）腐植土 基層の粒径により a : 細、b : 粗に細分できる。平成 23 年度調査区では、a 層は灰色粘土粒を含み、b 層は茶色味が強い。調査区西側の低地で確認できる。放射性炭素年代測定値は A D 40 ± 30 年を示す。

VII 層 暗灰黄色（2.5 Y 5/2）粘質土 植物遺体を少量含む。



第4図 基本土層柱状図

VII層 灰褐色(5 YR 4/2)腐植土 a～c層に細分できる。a層とc層はほぼ同層で、多量の植物遺体で構成される。b層はVII層中に狭まる灰白色(2.5 Y 8/1)粘質土である。放射性炭素年代測定値はB C 200 ± 30年及びB C 850 ± 30年を示す。

- IX層 暗灰色（2.5 Y 5/2）粘質土 植物遺体を少量含む。
- X層 褐灰色（10 YR 4/1）～黒褐色（10 YR 3/1）腐植土 本層を構成する植物遺体と褐灰色粘質土の含有率により a～d 層に細分できる。
- XI層 灰色（5 Y 6/1）粘質土 植物遺体を少量含む。
- XII層 褐灰色（10 YR 4/1）腐植土 磷を少量含む。

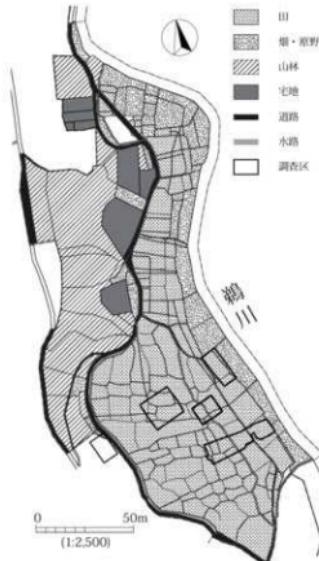
4 周辺の地形

千古作遺跡が立地する地形を遺構検出面であるV層（ピア4区はIV層）上面の高低差から見てみる（第4図）。鶴川に近いE地点（作業ヤード1区）・F地点（ピア2区）・G地点（平成23年度調査区東側）付近は、標高2.8m程で微高地状を呈する。D地点（平成23年度調査区西側）・C地点（ピア3区）で急激に標高を減じ2.2m程へと落ち込む。遺跡の西方に展開する剣野丘陵に近づくB地点（H 16-5 T）では約3.0m、A地点（ピア4区）では約3.2mと標高が徐々に上がっていく。土層柱状図からは、D地点からA地点にかけて遺構検出面であるV層より下位に腐植土層と粘土層が互層に堆積しており、低湿な環境が見て取れる。

明治の土地更正図（第5図）からは、盛土がなされる宅地造成以前の該地における土地利用のあり方がわかる。鶴川沿いには畠若しくは原野が展開する。これらは、鶴川の自然堤防を利用したものと判断できる。一方、西部は剣野丘陵裾に山林や宅地が展開し、一部に畠も存在する。その中間は田地として利用されており、明治のころでも該地が低湿な環境下にあったことを示している。

こうした鶴川左岸の自然堤防と剣野丘陵に挟まれた低湿な地帯の形成要因については、鶴川中流域の微高地と遺跡分布の検討からもかつては鶴川の旧流路若しくはこれに替わる河川が丘陵裾に沿って北流していた可能性が指摘されている〔品田 1995 b〕。また、鶴川は昭和期の改修以前には複雑に蛇行していたとの指摘〔高橋ほか 2003〕もあり、該地の低地が旧河川の河道跡であった可能性はある。ただし、本遺跡の腐植土層中には大型の流木などが混在していないことから常時流水する大規模な河川ではなく、時折滞水するような後背低地である可能性も考えられよう。

千古作遺跡で確認した腐植土層は、古代以後の遺構検出面（V層）にバックされており、その形成時期は古代よりも古い。層中からは遺物が出土していないため具体的な形年代は不詳であるが、腐植土層中の放射性炭素年代測定値は A D 40 ± 30 年（VI層）と B C 200 ± 30 年及び B C 850 ± 30 年（VII層）を示しており、縄文晩期～弥生時代を含む時期に形成された可能性が高い。



第5図 字千古作土地更正図と調査区
〔柏崎市教育委員会提供〕

第IV章 遺構

1 概要

2011年度調査で検出した遺構は、掘立柱建物1棟、溝2条、土坑1基、性格不明遺構1基、ピット6基である。それらはすべて溝SD201以東の標高2.6～2.7m付近の比較的高い地点に立地する。調査区の標高は、SD201を境として西部に向かい標高を減じ、北西端が最も低く2.1mを測る(図版3)。

遺構はすべてV層上面で検出した。遺構内からは遺構の年代を示す遺物がほとんど出土しなかったものの、Ⅲ層(中世後期を中心とする包含層)で覆われていることから、中世後期を中心とする遺構と考えられる。

2008年度調査でも同様に鶴川に近いグリッド9・10列を中心とする標高2.6～2.7mの地点で井戸や土坑、ピットを検出し、標高の低い西部(グリッド2～8列)では水田を検出した。建物や井戸などを検出した微高地は鶴川に沿って展開していることから、鶴川左岸の自然堤防が居住域として利用されたものと考えられる。一方、西部の低地は丘陵裾までの間は自然堤防の後背低地で、水田などの生産域として利用されたものと考えられる。

2 記載の方法

遺構の種別は略号を用い、掘立柱建物：S B、溝：S D、土坑：S K、性格不明遺構：S X、ピット：Pとした。遺構番号は、2008年度に付した遺構番号との重複を避けるために、遺構の種別毎に201番から順に通し番号を付し、遺構番号を頭に付けた。個々の説明は本文(遺構各説)、図面・写真図版を用いる。ただし、写真図版はすべての遺構を掲載していない。遺構の主軸方向の表記は千古作跡I「石川ほか2011」に準拠し、長径及び長軸を基準として真北からの角度を測定して、N○°E(W)と表した。

3 各説

A 掘立柱建物(図版4・7・8・9)

S B 201 9 N・9 O・10 N・10 Oグリッドから、1間×1間の掘立柱建物を検出した。建物はP201・202・203・204で構成される。規模は、短軸約2.0m、長軸3.7mを測る。ただし、短軸はP203-P204間で2.05m、P201-P202間で1.85mと差異があり、やや歪な形状である。柱穴の平面形はほぼ円形で、すべて断面U字形を呈する。直径は21～24cm、深さ20～26cmを測り、底面標高は2.35～2.40mである。覆土は基本的に黒褐色土と緑灰黄褐色土からなる。すべての柱穴に柱は遺存していないが、P201の底面には破損した板状木製品2枚を交差させて敷いてあり、柱の沈下防止のための礎盤(板)と考えられる。礎盤(板)は、長さ10.5cm・幅5cm・厚さ1.2cmの板(第6図下)の上に、長さ19cm・幅6cm・厚さ2cmを

	平面形	長軸	短軸	深さ	底面標高
P201	円	24	22	22	2.37
P202	円	24	21	25	2.40
P203	円	21	20	20	2.36
P204	円	22	20	26	2.40
P212	円	16	16	15	2.45

法量はcm、標高はm

第3表 S B 201柱穴観察表

測る片端に突起を持つ板（第6図上）を重ねている。

P 202 と P 201 の延長線上に P 212 があり、S B 201 を構成する柱穴の1つである可能性がある。その場合、南北に長い梁間1間型建物の可能性がある。ただし、P 212 は P 201 ~ 204 と覆土と同じくするものの、直径が16cm、深さが15cm程度で、底面標高が2.45mと他の柱穴より小型で浅い。また、P 201-202 間が1.85mであるのに対し、P 201-212 間は1.18mと狭いことから、主屋の北側に付属する廂の柱穴である可能性も考えられる。

検出した主屋の長軸方向は、N 78°Eである。この長軸方向は、北西に30m離れた2008年度調査（作業ヤード1区）で検出した、15世紀後半以降の水田の可能性がある S D 5・6・7に近似する。



第6図 P201 出土の礎盤（板）

B 溝（図版3・5・10）

溝は、S D 201・202 の2条を検出した。

S D 201 は8N・Oグリッドに位置する。幅約1.5m、深さ約0.2mを測り、主軸方向はN 24°Wである。覆土は、上層（1~3層）・下層（4~5層）に大別でき、時期により流路を若干変えながら南から北へ流れているものと考えられる。下層はS K 201 に切られている。溝の覆土からは、土器片が2点出土しているが、細片のため、器種及び年代は不明である。

S D 202 は9Nグリッドに位置する。幅約0.7m、深さ約0.3mを測り、主軸方向はN 34°Wである。覆土にはブロック状の地山層が多く含まれ、人為的に埋め戻されているものと考えられる。底面をやや掘り下げた段階で、自然木を検出したが、本溝とは無関係である。覆土からは製塙土器（図版6・11-30・31）が出土しており、本遺構は古代まで遡る可能性がある。

C 土坑・性格不明遺構・ピット（図版3・4・5・9・10）

土坑はS K 201 の1基のみである。S K 201 の平面形は直径約60cmの円形で、断面は台形を呈している。深さは約20cmを測る。覆土は2層からなり、1層はⅢ層に、2層はV層に近似する。1層と2層の境は凹凸が著しい。S K 201 はS D 201 の下層を切っているが、具体的な時間差は不明である。

性格不明遺構はS X 201 の1基のみである。不整形の浅い溝状を呈し、幅約40cm、深さ約5~10cmを測る。東端は調査区外に延びる。主軸方向はN 66°Eである。S B 201 と平面プランが重なるため、時期が異なる可能性があるが、直接の切り合いがないため新旧は不明である。

掘立柱建物 S B 201 を構成すると考えられる柱穴以外のピットを一括して説明する。ピットはP 205 ~ 209 とP 213 の6基があり、分布は2か所に分かれ。P 205 ~ 209 はS D 201 とS D 202 の間に分布する。平面形は円形又は楕円形で、P 208 を除き直径25~30cm程度である。深さは27~47cmとややばらつきがある。P 208 はやや大型で、平面形が長軸46cm、短軸36cmの楕円形を呈し、深さは55cmを測る。P 208 とP 209 には断面に柱痕が認められることから、これらのピットの大部分は、建物の組み合わせは不明であるものの柱穴である可能性が高い。P 213 はS B 201 の近隣に位置する。S B 201 の柱筋とは外れているため、S B 201 を構成する柱穴ではない。南半が調査区外に延び、遺存部の深さは12cmを測る。

	平面形	長軸	短軸	深さ	底面標高
P205	円	28	24	35	2.42
P206	楕円	32	20	47	2.29
P207	円	28	26	42	2.36
P208	楕円	46	36	55	2.18
P209	円	26	24	27	2.45
P213	—	—	—	12	2.43

法量はcm、標高はm

第4表 ピット観察表

第V章 遺物

1 概要

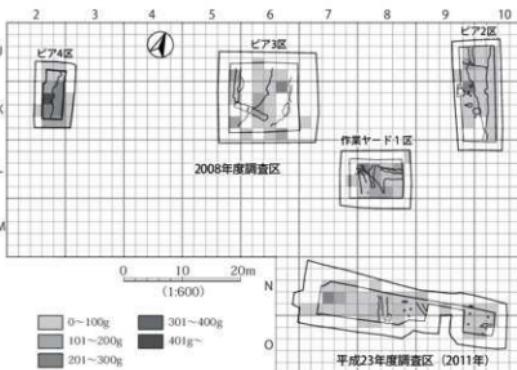
平成23年度調査区からは、150点(1,904.4g)の遺物が出土した。その内、148点が包含層からの出土である(第5表)。遺構内からは、SD202から製塙土器(図版6-30・31)が出土している。

包含層は、II a・b層、II e層、III層である。各層の出土遺物をみると、III層からは38点出土し、総量の25.3%を占める。陶磁器類では白磁・珠洲焼・越前焼・土師質土器皿¹⁾などが見られることから中世後期を主体とする層である。近世の肥前系青磁を1点含むものの、主体をなさないことから混入と考えられる。II e層からは78点出土し、総量の52%を占める。III層で見られる陶磁器類の他、青花・青磁・備前焼が組成に加わり、中世後期の中でも後出的な様相が強い。また、肥前系陶器が定量見られることから、年代下限は近世初頭と考えられる。土師質土器皿はIII層がロクロ成形のものが多いのに対し、II e層では手づくね成形が卓越する。II a・b層からは32点出土し、総量の21.3%を占める。瀬戸美濃焼や珠洲焼などの中世の陶器も含むが、肥前系陶器・磁器、越中瀬戸焼など近世の陶磁器が主体を占める。特に、肥前系陶磁器の中では、陶器より磁器の比率が高く、II e層より新しい様相であり、本層を近世初頭以降に比定できる。

繩文土器、須恵器、土師器碗・杯などは各層から数点出土しているが、まとまりを欠き、明確な該期の遺構も検出されていないことから、剣野B遺跡などの近隣遺跡からの流入と考えられる。

遺物分布は、散在し、集中か所は認められず(第7図)、2008年度の近隣

調査区の状況と似る。



第7図 遺物の重量分布図

層位	層名	遺構名	船橋跡組合			櫛口			土屋質土器組合			土器	縄文	中世	近世	肥前	青磁	珠洲	備前	瀬戸	金剛山	石製品	() 内單数	
			青花	青磁	白磁	白磁	珠洲焼	越前焼	備前焼	ナツカシ	ロクロ													
II a・b	I									4	1	1	6	1	4	8						4		32 (3200g)
II e		2	1	2	5		3	2	1	17	5	2	23		10	1	1				1	2	78 (8760g)	
III				1		3	3		1	5	1	15			1		1	3	3	38 (8154g)				

第5表 層位別出土遺物数量表(破片数)

1) 第5表では、中世以降の土器皿(いわゆる「かわらけ」)を「土師質土器皿」とし、土師質土器皿と繩文土器以外の土器を「土器」に包括した。

2 記載の方法

遺物は最初に、出土遺物の中で最も多い中・近世の土器・陶磁器類を層位に関係なく、器種ごとに図示し、次いでそれ以外（縄文時代・古代）の土器について図示した。その後、木製品、鍛冶関連遺物・金属製品、石製品の順に図示した。各説もその順に従う。各遺物の出土層位は観察表に記した。

土器・陶磁器類の分類・年代観については、青花は〔小野 1982〕、青磁は〔水澤 2004〕、白磁は〔森田 1982〕、珠洲焼は〔吉岡 1994〕、越前焼は〔木村 2008〕、備前焼は〔乗岡 2002〕、肥前系陶磁器は〔大橋 1993〕、土師質土器皿は〔品田 1999、水澤 2005〕を参考とした。

3 各 説

A 中・近世の土器・陶磁器（図版6・11－1～27）

1～4は舶載陶磁器である。1は景德鎮窯系の青花の椀で、底部は遺存していないものの、蓮子椀になるものと考えられ、小野C群椀に比定される。15世紀後半～16世紀前半ころの所産である。2は龍泉窯系の青磁の椀である。口縁はやや内湾し、反らすに立ち上がる器形で、釉に厚みがあり、遺存部に文様が見られないことから、水澤氏の直線無文椀に分類される。15世紀の中葉から末にかけて流通する。3と4は白磁の皿底部である。ただし、3は底径が小さいことから小杯の可能性がある。どちらも平高台を削り出しており、高台付近が無釉となる。釉は3がガラス質化し白色を呈するのに対し、4は白濁しムラが生じており貫入が多く、色調もやや黄色味が加っている。どちらも胎土が軟質であることから、森田D群に比定され、15世紀代の所産と考えられる。

5と6は肥前系陶磁器である。5は磁器の染付皿である。釉は青味がかったり、ムラが生じていることからいわゆる「初期伊万里」で、大橋II-2期（17世紀第2四半期ころ）の所産である。6は陶器の皿底部である。内面に灰釉を施し、外面は無釉である。内底面には砂目積みの痕跡が3か所認められ、高台内にも単位は不明であるが砂目が認められる。大橋II期（1610～1650年代）の所産である。

7～20は土師質土器皿でいわゆる「かわらけ」である。成形技法により2種に大別され、7～11はロクロ成形、12～20は手づくね成形である。ロクロ成形の底部は回転糸切り技法により切り離される（7・11）。器形から判断して、15世紀代の所産である。手づくね成形の製品は、器壁の厚いタイプ（12）と薄いタイプ（13～20）に分けられる。前者（12）は下沖北遺跡C I b類との共通性〔山崎 2003〕から13世紀後半～14世紀前半の所産と考えられる。後者は、いわゆる「京都系第2波」〔品田 1999〕の影響を受けた京都系の土師質土器皿で、15世紀後半以降の所産と考えられる。8・17・18・20にはススやタルルが付着しており、灯明皿として使用されたものと考えられる。

21は土製品の鳩笛である。頭部を欠損しているが、それ以外は完形である。尾部から背部にかけて通気孔があけられ、現在でも音が出る。また、羽の一部分に赤彩の痕跡が残ることから、彩色されていた可能性が高い。鳩笛は、江戸では近世後期以降の遺跡から出土〔安芸 2001〕し、現在でも作られていることから、本品も近世後期以降の所産と考えておきたい。

22～26は捕鉢又は片口鉢である。22は越前焼である。口縁端部が内傾し、口縁部からやや下方の内面に太い沈線が巡る形状から木村V期（15世紀末～16世紀）に比定される。また、消費地での越前焼の検

討〔水澤 2009〕によれば、それらは 16 世紀前半の特徴とされる。23～25 は珠洲焼である。23 と 25 の口縁端部には櫛描波状文が施され、24 と 25 には片口部が付く。23 と 25 は吉岡Ⅴ期（14 世紀第 4 四半期～15 世紀前半）、24 は吉岡Ⅳ～Ⅴ期（14 世紀～15 世紀前半）の所産である。24 の破断面の一一部には漆雜ぎの痕跡が認められる。26 は備前焼である。底部外面にはタタキ成形を行った際の細かな凹凸が全面に認められる。底部内面には櫛状卸目が放射状に施されるものの、單位間に隙間を残すことから、中世後期から近世初頭の所産と考えられる。

27 は肥前系陶器の瓶である。口縁端部は内側に嘴状に突出し、上端面は平坦となる。内外面に鉄軸を施すが、上端面は無軸である。タタキ技法により成形され、内面には同心円状の当て具痕が認められる。外面は横位のカキメにより調整されている。大橋 I～II－I 期（16 世紀末～17 世紀初頭）の所産である。

B 繩文土器・古代の土器（図版 6・11－28～31）

28 は縩文土器片である。器表面に原体 R L の斜縩文が施される。29～31 は古代の遺物と考えられる。29 は須恵器の腹胴部片である。外面に格子状の叩き目、内面に同心円状の当て具痕を残す。30 と 31 は製塙土器である。内外面に輪積み痕を残し、粗いハケメ調整を行う。30 の口縁は水平にならず歪む。被熱のため、脆い。30 と 31 は接合しないものの、胎土及び調整方法が近似し、同一個体である可能性が高い。新潟県においては、中世の製塙には土器を用いないとの見解があり〔高橋 1999〕、古代に含めた。

C 木製品・鍛冶関連遺物・金属製品・石製品（図版 6・11－32～38）

32 は漆器椀である。底部片であるが、遺存率が悪く、高台の有無及び形状は不明である。素材は横木取りである。内外に黒漆を塗布した後、内面のみに赤漆を重ね塗りしている。県内の挽物の変遷を検討した春日真実氏によれば、外面黒色漆・内面赤色漆を塗布した漆器椀は 15 世紀後半に増加するという〔春日 2000〕。

33 と 34 は鍛冶関連遺物である。33 は楔形津である。磁着しないことから、鉄を含まないか含んでも極めて微量と考えられる。34 は羽口である。筒状を呈する端部片で、中心に直径約 40mm の円孔があけられている。被熱により脆く、外面には溶解した鉛津が厚く付着する。遺存部の最大外径は 70mm である。

35 と 36 は銅製品である。35 は柄である。断面は袋状を呈し、上端が広く、下端が狭い。刀子などの刃物と組み合わせて使用した可能性が高い。装着部には、黒褐色の付着物が認められ、接着剤であろうか。36 は香炉の蓋である。側面観はドーム形を呈し、上部には透かしが施されている。底部には团子状の三脚が付く。内外面にススが付着しており、実際に火器として使用されていたことを示している。

37 は、安山岩を素材とした磨石である。正・裏面の中央付近が敲打により凹み、側面は平坦に磨られ、擦痕が付く。時期は不明である。38 は、軽石である。使用痕は認められないものの、地山には含まれず、中世には砥石などに利用されていることから、何らかの目的により外部から搬入された可能性が高い。

第VI章 まとめ

1 出土遺物からみた千古作遺跡の消長

千古作遺跡はこれまでに、2008年度と2011年度の2回の発掘調査が行われた。

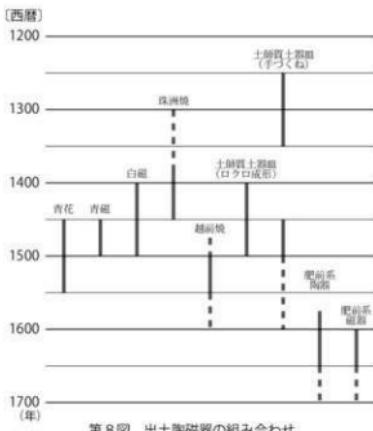
2008年度は、中世(12~16世紀)の遺物が主体的に出土し、古代の遺物と縄文土器、近世の遺物が少量出土している。その中最も多いのは、13世紀後半~15世紀後半ころの土器・陶磁器である。

2011年度では、150点(接合後破片数・第5表)の遺物の内148点が包含層中から出土した。最も多いのは、土師質土器皿37点(24.7%)である。土師質土器皿は、製作技法によりa類:手づくね成形とb類:ロクロ成形に分類できる。a類は22点、b類は11点である。a類は器壁が厚く内湾するタイプ(12)と、器壁が薄く外反(13・16・17~19)若しくは直線的に開くタイプ(14・15・20)がある。前者は下沖北遺跡[山崎2003]などとの共通性から13世紀後半~14世紀前半に位置付けられ、後者は「京都系第2波」[品田1999]の影響を受けていることから15世紀後半を中心に16世紀代を含む年代に位置付けられる。量比は、後者が圧倒的に多い。b類は、器形から15世紀代に位置付けられる。

供膳具では青花、青磁、白磁などの舶載陶磁器がみられる。青花は小野C群(15世紀後半~16世紀前半)、青磁は直線無文椀(15世紀中~後半)、白磁は森田D群(15世紀代)がある。貯蔵具・調理具には珠洲焼、越前焼、備前焼、肥前系陶器などがある。珠洲焼は吉岡V期(14世紀末~15世紀前半)が多い。越前焼は木村V期(15世紀末~16世紀)、備前焼は中世後期~近世初頭、肥前系陶器は大橋I~II~I期(16世紀末から17世紀初頭)の製品が見られる。

以上から、2011年度の調査区では15世紀が活動の中心であり、2008年度で見られた12~14世紀の遺物は極めて少ないといえる(第8図)。

そのほか、縄文土器と須恵器が2点ずつ出土しており、2008年度の様相と共通する。また、金属製品や漆器、石製品が中世陶磁器類と共に伴しておらず、該期にそれらの道具も使用されたと考えられる。近世陶磁器は肥前系陶器・磁器、越中瀬戸焼があるが、IIa~e層を中心とする包含層上位からの出土である。少量であることから、近世に至っても該地で小規模な活動が行われていたことを示している。



第8図 出土陶磁器の組み合わせ

2 遺跡周辺の微地形と土地利用

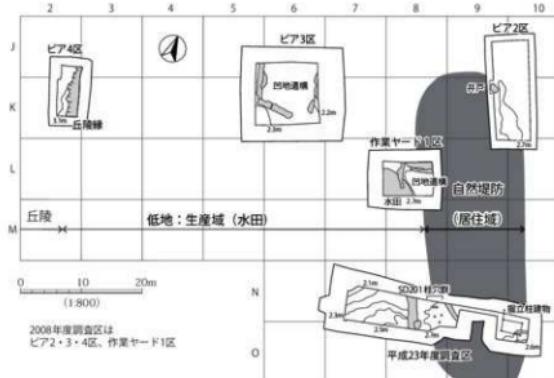
千古作遺跡は、東方を北流する鶴川と西方に展開する剣野丘陵の間に立地する。

遺跡地山面の標高は、遺跡東部のグリッド8～10列付近が2.6～2.7mと最も高い。この微高地は鶴川に沿って南北に展開することから、鶴川の自然堤防である可能性が高い。一方、遺跡中央部のグリッド5～7列は2.1～2.3mと遺跡内で最も低くなる。第Ⅲ章4で触れたように、この地点は明治の土地更正図(第5図)や土層観察(第4図)から鶴川の旧流路若しくは後背低地と考えられる。また、遺跡西部のグリッド2列付近は3.1mと急激に標高が上がることから、剣野丘陵裾部と考えられる。

平成23年度調査区で検出した遺構からは年代を示す遺物がほとんど出土していないものの、包含層で主体となる遺物の年代から、その多くは15世紀前後の構築である可能性が高い。2008年度の調査では、古代から近世までの遺構が検出されており、出土遺物と切り合い関係及び覆土の特徴により3期に整理している。その内、15世紀前後の遺構群は2期と3期であり、2期で最も多くの遺構が検出されている。

そこで、2008年度調査の2・3期と平成23年度調査区の検出遺構を組み合わせて本遺跡における15世紀前後の景観を復元してみたい(第9図)。居住域と考えられるのは、グリッド8～10列である。9N・9O・10Oからは掘立柱建物が検出されている。確認できたのは1間×1間の東西に長い長方形プランであるが、北側に廻が附属する可能性がある。この掘立柱建物は、調査区外に延伸する可能性もある。9Kからは井戸が検出されている。平面は長径1.57m・短径1.18mの楕円形で、深さは1.92mの素掘り井戸である。また、8N・8Oでは柱穴を含むピットが集中する。なお、井戸の近隣では時期不明ながらピットが6基検出されている。これらの遺構の分布は、自然堤防上に分布しており、微高地上を選択して居住域としていた様子が見て取れる。一方、低地(グリッド2～8列)からは、凹地遺構「小池1994」を含む水田が検出されており、生産域として利用されている。なお、ピア3区では14世紀前半には埋没していた自然流路中から円形枠付き田下駄が出土している。凹地遺構は自然流路上面に構築されていることから、該地は15世紀前のみならず、もっと古い時期から生産域として利用されていた可能性が高い。また、平成23年度調査区では微高地の縁に沿ってSD201が南北に走っており、土地区割の境界であった可能性がある。

こうした中世の微高地に応じた土地利用のあり方は、鶴川対岸(右岸)に立地する下冲北遺跡[高橋ほか2003、山崎ほか2005]でも、同様に見ることができる(図版1)。



第9図 千古作遺跡における検出遺構と土地利用のあり方(15世紀前後)

要 約

- 1 千古作遺跡は、新潟県柏崎市大字剣野町字千古作 288-3 ほかに所在する。遺跡は、鶴川河口から約 2.5 km 内陸の左岸に形成された自然堤防上及び剣野丘陵裾までの約 70 m 間の後背低地に立地し、標高は 2.1 ~ 3.1 m である。
- 2 調査は一般国道 8 号柏崎バイパスの建設に伴い、2011（平成 23）年度に実施した。調査面積は 331 m² である。
- 3 千古作遺跡は、2008（平成 20）年度に隣接する 850m² を調査しており、今回が 2 回目の発掘調査である。
- 4 調査の結果、中世（15 世紀前後を中心）と考えられる遺構と遺物を検出した。そのほか、縄文土器が 2 点と古代の土器・須恵器が 4 点以上出土した。
- 5 中世では、掘立柱建物 1 棟、溝 2 条、土坑 1 基、性格不明遺構 1 基、ビット 6 基を検出し、そのうち溝 1 条は古代に遡る可能性がある。包含層中からは、中世・近世初頭の土器・陶磁器類や漆器、金属製品、鍛冶関連遺物、石器などが出土した。
- 6 中世・近世初頭の陶磁器は 132 点出土し、青磁・白磁・青花の舶載品、瀬戸美濃・珠洲・越前・備前・肥前・越中瀬戸窯の国産品、在地土師質土器などがある。これらの年代は、15 世紀を中心とし、13 世紀後半～14 世紀及び 16・17 世紀の製品が少量ある。
- 7 15 世紀前後では、自然堤防上の微高地を居住域とし、後背低地に水田を構築するなど微地形に応じた土地利用のあり方が見て取れる。こうした土地利用のあり方は、千古作遺跡の対岸（鶴川右岸）に立地する下沖北遺跡（13～14 世紀）でも同様である。
- 8 縄文時代や明確な古代の遺構は検出していない。
- 9 少量出土した縄文土器や古代の遺物は、千古作遺跡西方の剣野丘陵に立地する剣野 B 遺跡を含む剣野山縄文遺跡群（柏崎市指定史跡）などからの流入である可能性が高い。

引用・参考文献

- 相沢央・小林昌二 2000 「柏崎市箕輪遺跡出土木簡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成11年度 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 安芸謙子 2001 「やきもの製人形類」『国説江戸考古学研究事典』江戸遺跡研究会編 柏書房
- 石川智紀 2009 「剣野町遺跡」『理文にいたが』No.66 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石川智紀^{ほか} 2011 『一般国道8号柏崎バイパス関係発掘調査報告書IV 千古作遺跡 香積寺沢遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第214集 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 宇佐見篤美 1987 「大原遺跡」『柏崎市史資料集』考古篇1 柏崎市史編さん委員会編 柏崎市史編さん室
- 大野隆一朗^{ほか} 1990 「大地」『柏崎市史』上巻 柏崎市史編さん委員会編 柏崎市史編さん室
- 大橋康二 1993 「肥前陶磁」考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 岡田和則^{ほか} 2000 「箕輪遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成11年度 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 萩野正博 1983 「越後國中世莊園の成立」『新潟史学』第16号 新潟史学会
- 小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 小野塚徹夫^{ほか} 2002 『一般国道8号柏崎バイパス関係発掘調査報告書I 箕輪遺跡I』新潟県埋蔵文化財調査報告書第109集 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 2000 「第VII章まとめ 3木製品 A古代・中世における挽物・曲物の変遷」『一般国道116号和島バイパス関係発掘調査報告書I 大武遺跡I(中世編)』新潟県埋蔵文化財調査報告書第97集 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金子拓男 1987 「三諦寺経塚遺跡」『柏崎市資料集』考古篇1 柏崎市史編さん委員会編 柏崎市史編さん室
- 金子拓男 1990 「第6章第5節交通と交通路」「第6章第6節 延喜式内神社」『柏崎市史』上巻 柏崎市史編さん委員会編 柏崎市史編さん室
- 金子 達 1976 「刈羽郡の荘・保」『かみくひむし』第21号 かみくひむしの会
- 木村孝一郎 2008 「越前焼の編年研究ノート」「吾々の考古学」和田晴吾先生還暉記念論集刊行会
- 小池義人 1994 「第IX章 1. 中世の凹地遺構と溝について」『磐越自動車道関係発掘調査報告書 細池遺跡・寺道上遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第59集 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鹿又喜隆 2011 「第III章千古作遺跡 4自然科学分析 A放射性炭素年代測定」『一般国道8号柏崎バイパス関係発掘調査報告書IV 千古作遺跡 香積寺沢遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第214集 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 品田高志 1990 「千古塚—新潟県柏崎市南下・千古塚遺跡発掘調査報告一」柏崎市埋蔵文化財調査報告書第11集 柏崎市教育委員会
- 品田高志 1995a 「藤橋東遺跡群—写真がつづる発掘調査の概要一」柏崎市埋蔵文化財調査図録第1集 柏崎市教育委員会
- 品田高志 1995b 「[■]総括 1 薄川中流域における古代・中世の遺跡」『柏崎市の遺跡IV—柏崎市内遺跡第IV/期発掘調査報告書一』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第20集 柏崎市教育委員会
- 品田高志 1997 「越後国における土師器の変遷と諸相」『中・近世の北陸—考古学が語る社会史一』北陸中世土器研究会編 桂書房
- 品田高志 1999 「越後における中世後期の土師器皿—京都系土師器第2波の流入と展開ー」『中世土器の基礎的研究』XIV 日本中世土器研究会
- 品田高志・平吹靖 2001 『十三本塚北—新潟県柏崎市十三本塚遺跡群・十三本塚北遺跡発掘調査報告書一』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第37集 柏崎市教育委員会

- 品田高志ほか 2000 『横山東遺跡群Ⅰ—新潟県柏崎市・横山東遺跡群発掘調査報告書Ⅰ』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第34集 柏崎市教育委員会
- 品田高志ほか 2001 『柏崎町—新潟県柏崎市・柏崎町遺跡発掘調査報告書Ⅰ』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第38集 柏崎市教育委員会
- 品田高志ほか 2011 『剣野—新潟県柏崎市剣野遺跡群・剣野B遺跡発掘調査報告書Ⅰ』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第63集 柏崎市教育委員会
- 新沢佳大 1970 『柏崎編年史』上巻 柏崎市
- 新沢佳大 1990 「第1章 幕藩体制の支配」『柏崎市史』中巻 柏崎市史編さん委員会編 柏崎市史編さん室
- 新沢佳大ほか 1990 「第3章第4節 町村の展望」『柏崎市史』中巻 柏崎市史編さん委員会編 柏崎市史編さん室
- 鈴木郁夫ほか 1988 『土地分類基本調査 国野町』新潟県
- 鈴木郁夫ほか 1989 『土地分類基本調査 柏崎・出雲崎』新潟県
- 高橋 保 1999 「製塙」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 高橋 保ほか 1979 『北陸自動車道沿線文化財発掘調査報告書 下谷地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第19集 新潟県教育委員会
- 高橋 保ほか 2003 『一般国道8号柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ 下沖北遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第125集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 中 大輔 2003 「日本古代の聚落と地域社会—越後国三船駅の事例を中心に—」『古代交通研究』第13号 古代交通研究
- 中野 純 1995 「Ⅶ章総括 2 鮫波地区東部における繩文遺跡の立地」『柏崎市の遺跡Ⅳ—柏崎市内遺跡第Ⅳ期発掘調査報告書Ⅰ』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第20集 柏崎市教育委員会
- 中野 純 1998 「柏崎市大宮町文前期集落遺跡」『新潟県考古学会第10回大会 研究発表・調査報告等要旨』新潟県考古学会
- 中野 純 2003 「柏崎市琵琶島城跡の調査概要」『新潟県考古学会第15回大会 研究発表会発表要旨』新潟県考古学会
- 中野 純 2008 「よみがえった古代の製鉄」柏崎の遺跡シリーズ第1集 柏崎市教育委員会
- 乗岡 実 2002 「近世備前焼播磨の編年案」『岡山城三之曲輪跡』岡山市教育委員会
- 藤巻正信 1988 『北陸自動車道沿線文化財調査報告書 西田・鶴巻田遺跡群』新潟県埋蔵文化財調査報告書第27集 新潟県教育委員会
- 水澤幸一 2004 「15世紀前葉から中葉の貿易陶磁器様相」『貿易陶磁研究』24 日本貿易陶磁研究会
- 水澤幸一 2005 「越後の中世土器」『新潟考古』16 新潟県考古学会
- 水澤幸一 2009 「15世紀末～16世紀中葉の陶磁器様相—貿易陶磁と越前一」『新潟県の考古学Ⅱ』新潟県考古学会
- 村山教二 1990 「第1章第2節 越後における莊園制の展開」『柏崎市史』上巻 柏崎市史編さん委員会編 柏崎市史編さん室
- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 山崎忠良 2003 「第VII章まとめ 土器・陶磁器について A 土師質土器皿について」『一般国道8号柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ 下沖北遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第125集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山崎忠良ほか 2005 『一般国道8号柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ 東原町遺跡・下沖北遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第140集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山田邦明 1987 「第2章第2節3 国人と守護」『新潟県史』通史編2中世 新潟県
- 山田英雄 1986 「第5章第2節 国郡制の成立・整備」『新潟県史』通史編1原始・古代 新潟県
- 吉岡康暢 1994 『日本海城の土器・陶磁器 [中世編]』六興出版
- 米沢 康 1980 「大宝二年の越中国四部分割をめぐって」『信濃』第32巻第6号 信濃史学会

土器・陶磁器

番号	分類	ダリッド	寸法 大・小	部位	表面性状 外・内面	色調 白・黒色粒子、黒・白色粒子、白・青白、チャート、青・海緑等	形状 下寸・上寸	制作痕跡	使用痕跡	備考				
幅	高さ	寸法	大・小	部位	表面性状 外・内面	色調 白・黒色粒子、黒・白色粒子、白・青白、チャート、青・海緑等	形状 下寸・上寸	制作痕跡	使用痕跡	備考				
1	青花	板	7N 18	IIe	136	—	明暦灰 1067/1	明暦灰 527/1	灰白 白	外：織紋（透空文） 内：織紋（透空）	—	小野C都極 15世紀後半～16世紀前半		
2	青磁	板	8N 22	IIe	130	—	灰青 7.5N/2	灰青 7.5N/2	灰白 白	—	—	小野C都極 15世紀後半～16世紀前半		
3	白磁	板	100 6	II	—	40	灰白 2.5N/1	白 2.5N/1	白 白	外底部：無施	—	高田D板 15世紀後半～16世紀前半		
4	白磁	板	8N 24	IIe	—	42	灰白 2.5N/2	灰白 2.5N/2	白 白	外底部：無施	高田D板 15世紀後半	AMII D板 15世紀後半		
5	肥前系陶器	板	8N 19	IIa+b	123	—	灰白 52N/1	明暦灰 7.5GYN/1	灰白 白	外：織紋（透空花卉文）	—	明暦灰（透空）（大城D 2期） 17世紀後半第四至第五		
6	肥前系陶器	板	8N 24	I	—	40	灰白 2.5N/1	灰白 2.5N/1	白 白	外：織紋（透空花卉文） 内：外底部：織紋輪廻	—	大城D板 1610～1650年代		
7	土器	板	9N 10	II	75	13	63	灰白 10YR7/2	灰白 10YR6/4	灰白 10YR6/4	机：回転式切切り	—	—	
8	土器	板	8N 24	I	98	22	60	灰白 2.5N/2	灰白 2.5N/2	白 白	—	—	13：丸穴× 多孔	
9	土器	板	8N 19	II	98	—	2.5N/2	10YR7/2	灰白 10YR7/2	—	—	—		
10	土器	板	7N 13	II	398	—	2.5N/1	灰白 10YR7/2	灰白 10YR7/2	—	—	—		
11	土器	板	100 2	II	—	54	灰白 10YR5/3	灰白 10YR5/3	灰白 10YR6/4	机：回転式切切り	—	—		
12	土器	板	7N 18	II	116	—	2.5N/2	2.5N/2	灰白 2.5N/2	—	—	—		
13	土器	板	8N 24	IIe	78	19	40	灰白 2.5N/2	灰白 2.5N/2	灰白 2.5N/2	外：曲ねえん	—	—	
14	土器	板	8N 23	IIe	92	—	灰白 2.5N/1	灰白 2.5N/1	灰白 2.5N/2	外：曲ねえん	—	—		
15	土器	板	7N 13	IIe	96	—	2.5N/2	2.5N/2	白 白	—	—	—		
16	土器	板	7N 18	IIe	397	—	2.5N/2	2.5N/2	灰白 2.5N/2	内：曲ねえん	—	—		
17	土器	板	7N 23	IIa+b	132	65	60	灰白 2.5N/2	灰白 2.5N/2	白 白	外：曲ねえん 内：底	—	—	
18	土器	板	9N 23	IIe	141	—	灰白 2.5N/1	灰白 2.5N/1	灰白 2.5N/2	内：曲ねえん	内：底	—		
19	土器	板	8N 22	IIe	140	—	灰白 2.5N/2	灰白 2.5N/2	灰白 2.5N/1	内：曲ねえん	—	—		
20	土器	板	8N 21	IIe	140	—	灰白 2.5N/2	灰白 2.5N/2	灰白 2.5N/1	外：曲ねえん	内：タール	—		
21	土器	板	7N 21	IIa+b	105	高さ 66	34	28	灰白 N/4D	灰白 N/4D	—	背・腹に透空孔 赤彩の一部に残る	—	—
22	越前焼	板	7N 18	II	350	—	灰白 52N/4	灰白 2.5N/2	灰白 2.5N/3	机：下・茶・単位以上 内：底	—	木村V期 15世紀末～16世紀		
23	爲能焼	片口	100 6	II	—	灰 NS/2	灰 NS/2	灰白 NS/2	机：織紋透空文 内：底	—	吉田V期 14世紀第4四半期～15世紀前半			
24	爲能焼	片口	7N 15	IIe	490	—	灰 NS/4	灰 NS/4	灰白 527/1	机：下・茶・単位以上 内：底	—	吉田V期～V期 14世紀～15世紀前半		
25	爲能焼	片口	10N 21	II	486	—	灰 NS/5	灰 7.5N/1	灰 7.5N/1	机：織紋透空文 内：底	—	吉田V期 14世紀第4四半期～15世紀前半		
26	備前焼	板	7N 20	IIe	—	—	灰白 2.5N/6	灰白 2.5N/6	灰白 2.5N/6	外底部：タキシ 内：底	—	中井B期～近藤相良 15世紀後半～16世紀		
27	肥前系陶器	板	8N 21	IIe	146	—	灰白 10YR6/2	灰白 10YR6/2	灰白 2.5N/2	内：底 外：織紋：カキメ 内：底内側当て具足	—	大橋一Ⅱ・I期 16世紀末～17世紀初期		
28	鍋文太郎	深鉢	7N 24	IIa+b	—	—	浅黄白 10YR6/2	灰白 2.5N/2	灰白 2.5N/2	原底：BL	—	—		
29	鍋文太郎	鉢	7N 19	IIe	—	—	灰 N/4D	灰白 N/4D	灰白 52N/3	外：硝子口折り目付 内：底内側当て具足	—	—		
30	土器 (古代)	製陶土器	9N 21	Z	158	—	灰白 Z.5YR7/1	灰白 Z.5YR6/6	灰白 52YR7/1	—	SD202出土 31・20・印傳か	—		
31	土器 (古代)	製陶土器	9N 21	Z	—	100	灰白 52N/4	灰白 52N/3	灰白 52N/3	内：ハラメ 外：ハラメ	SD202出土 30・20・印傳か	—		

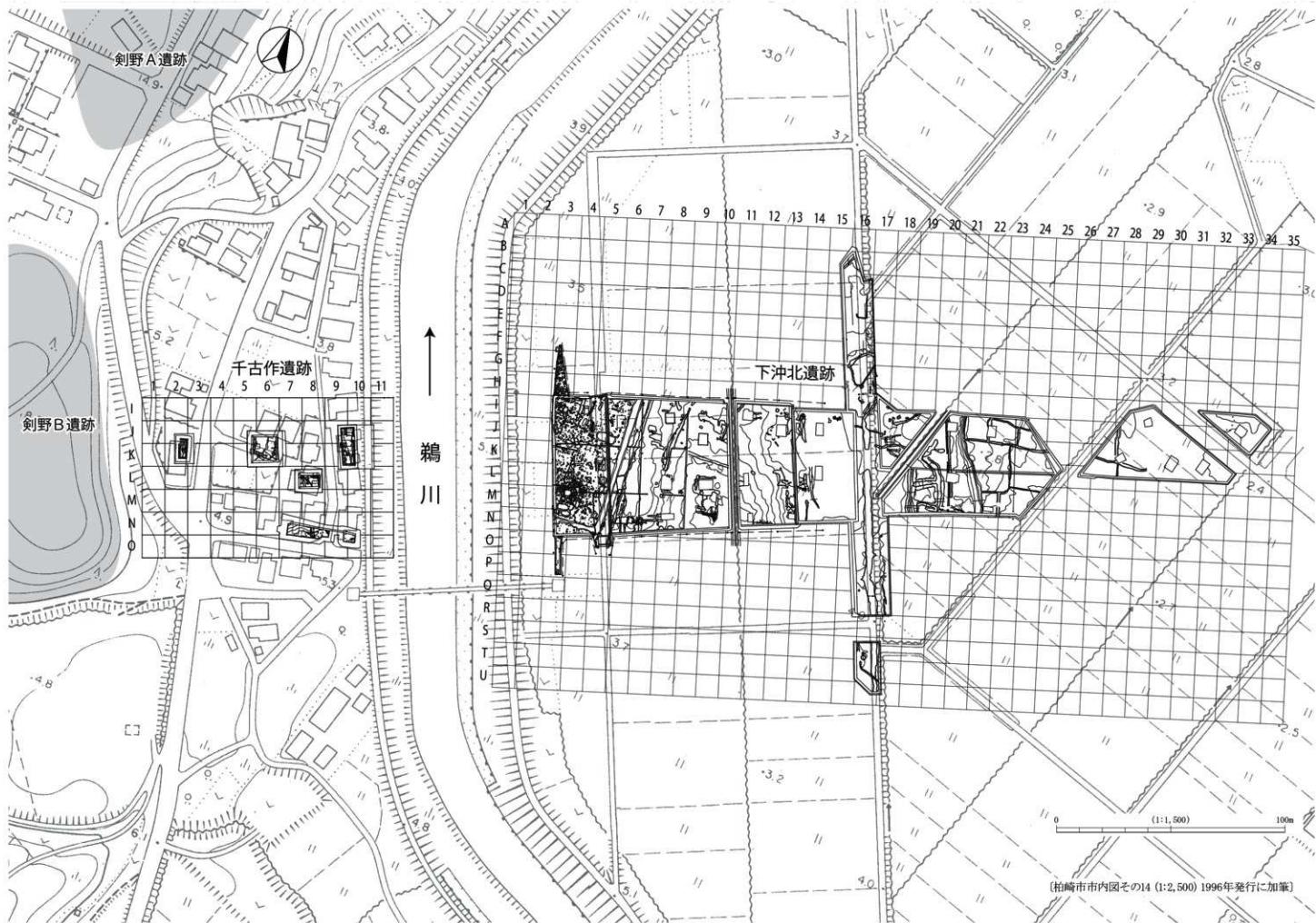
木製品・金属製品・鍛冶関連遺物・石製品

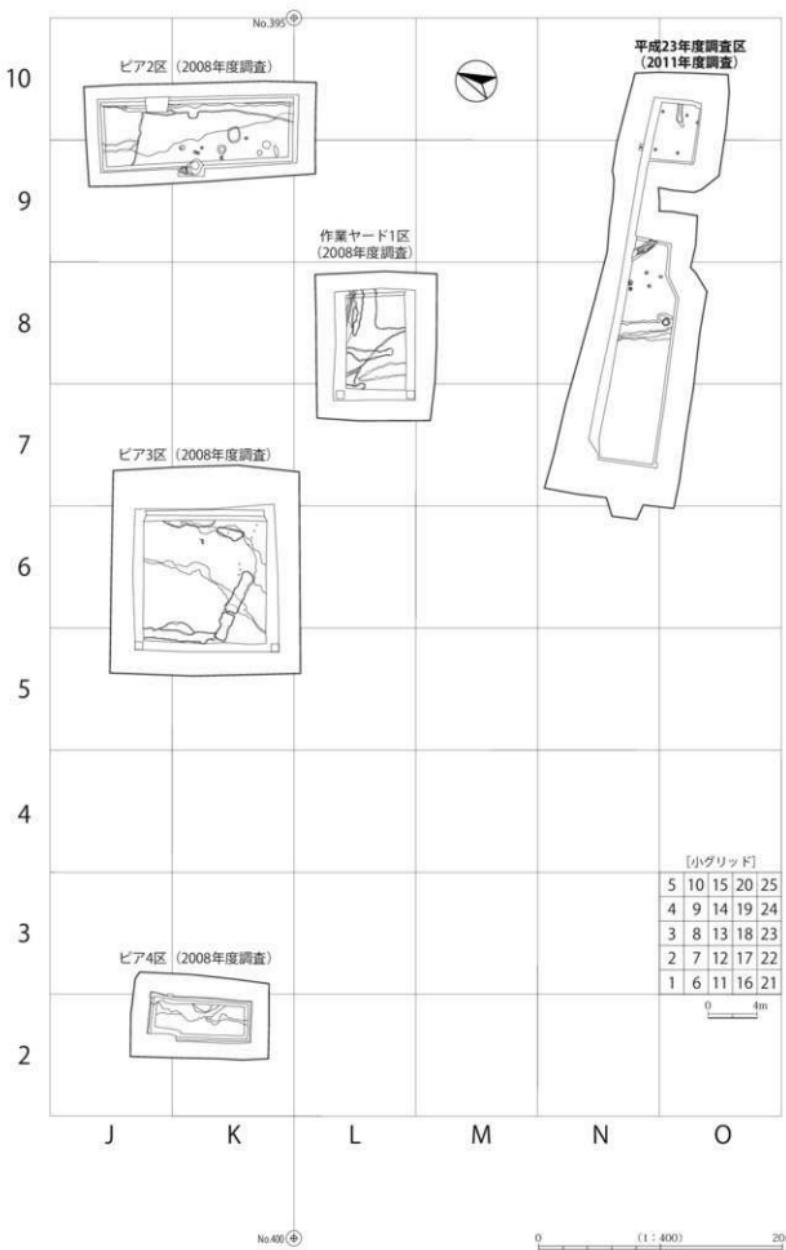
報告番号	種別	基部	材質 木皮なり	ダリッド	寸法 大・小	部位	形状 幅・高さ	厚さ・高さ mm	幅 mm	重量 kg	備考
32	木製品	漆器	紙本取り	90	5	III	—	—	底用 標準70	—	外：黒漆 内：黒漆～赤漆
33	製陶窯	鉢	洋	非呂氏	9N 21	—	44	17	27	0.1	SD202出土 硝着せず
34	製陶窯	羽口	土製品	8N	24	III	92	19	50	25.4	外径70mm、内径40mm
35	金屬製品	柄	銅	7N	18	IIe	92	13	7	19.5	—
36	金屬製品	香炉蓋	銅	8N	22	IIa+b	92	62	54	25.4	—
37	石製品	磨石	安山岩	7N	19	III	52	25	64	111.2	—
38	石製品	用達不明品	軽石	9N	21	IIe	94	60	73	76.7	—

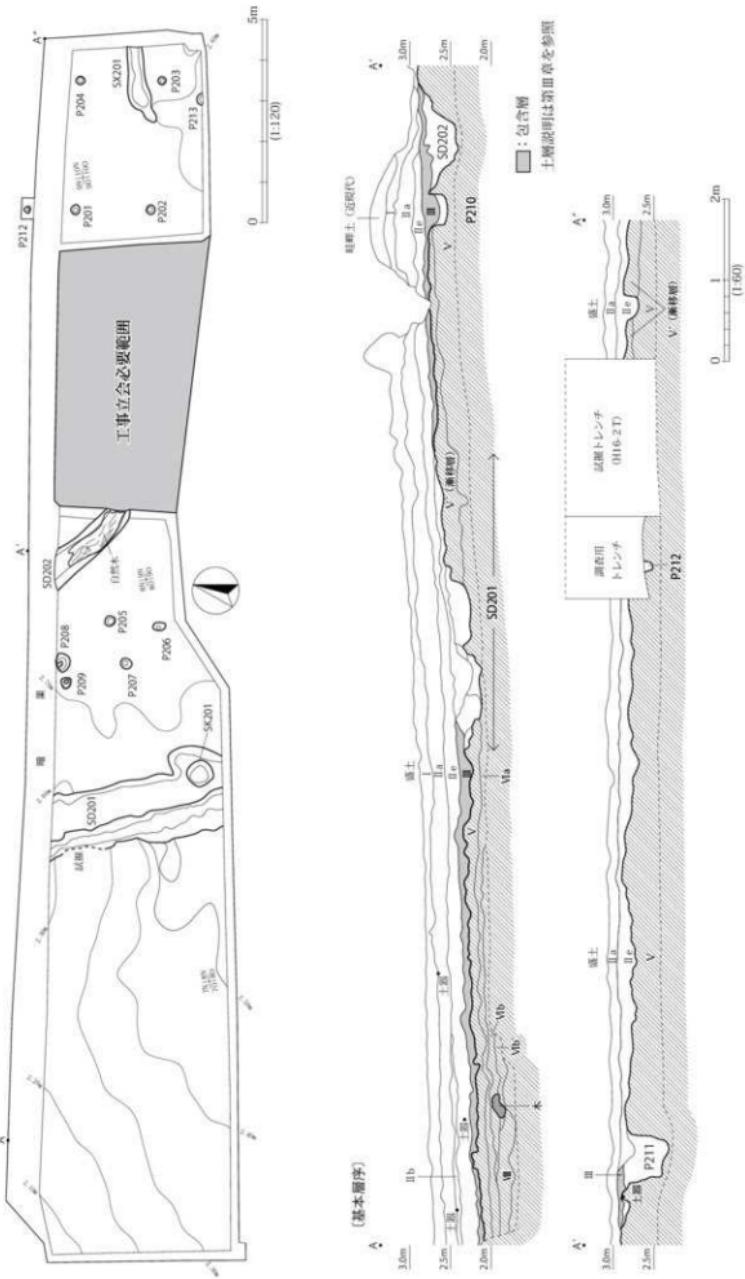
図 版

凡 例

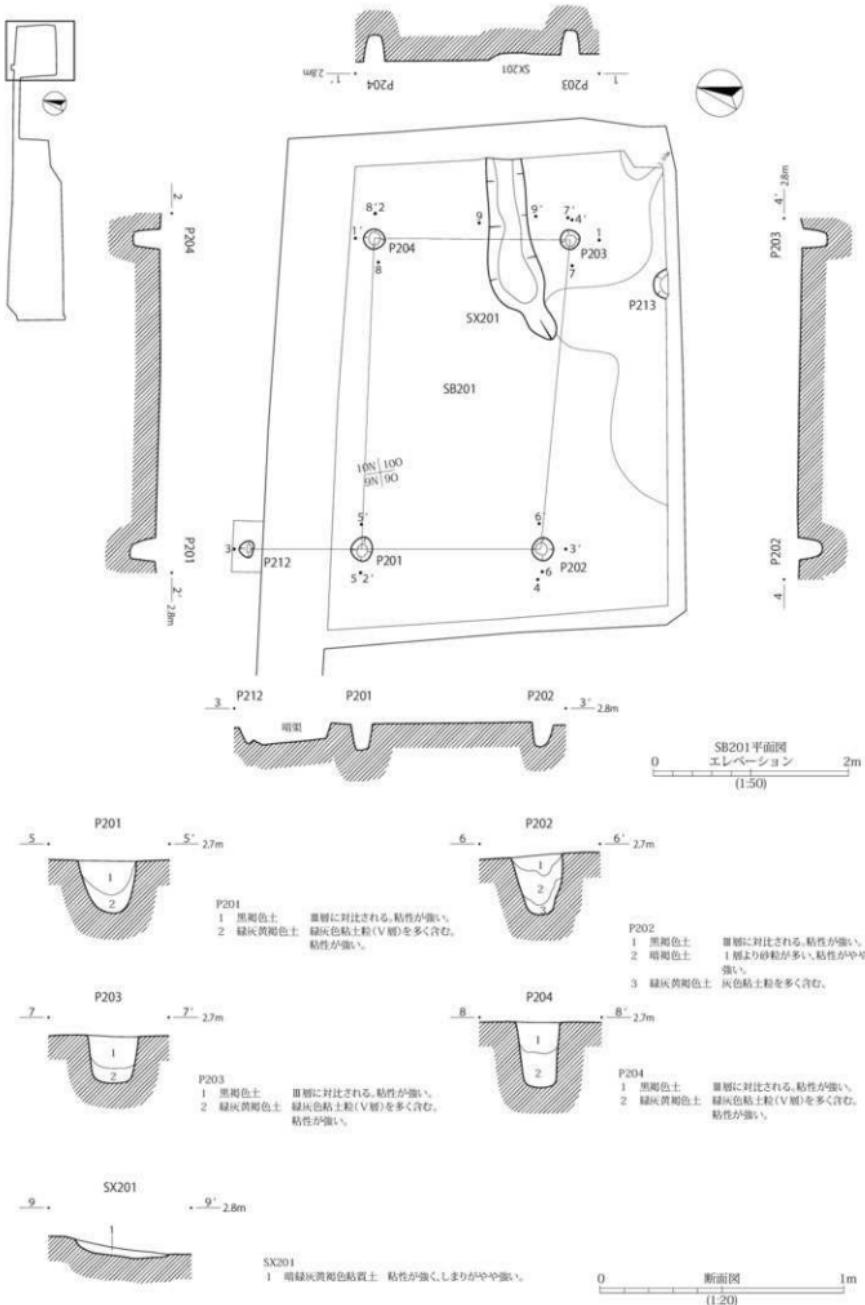
- 1 遺構断面図の地山以下は斜線のスクリーントーンで示した。
- 2 頸壺器の断面は黒塗りつぶしで示した。
- 3 タール及びスス・漆塗り・敲打痕・磨痕の範囲はスクリーントーンで示し、トーン種は図版中に示した。
- 4 口径及び底径が若干の誤差を含む推定値の場合は、口縁及び底面ラインの中央部付近の一部を切り、示した。
- 5 木製品の木目は木取部位表示を目的としているため、年輪幅は実際を示していない。
- 6 小片遺物の拓本は断面の左に内面、右に外面情報を配置した。ただし、縄文土器はその逆とした。

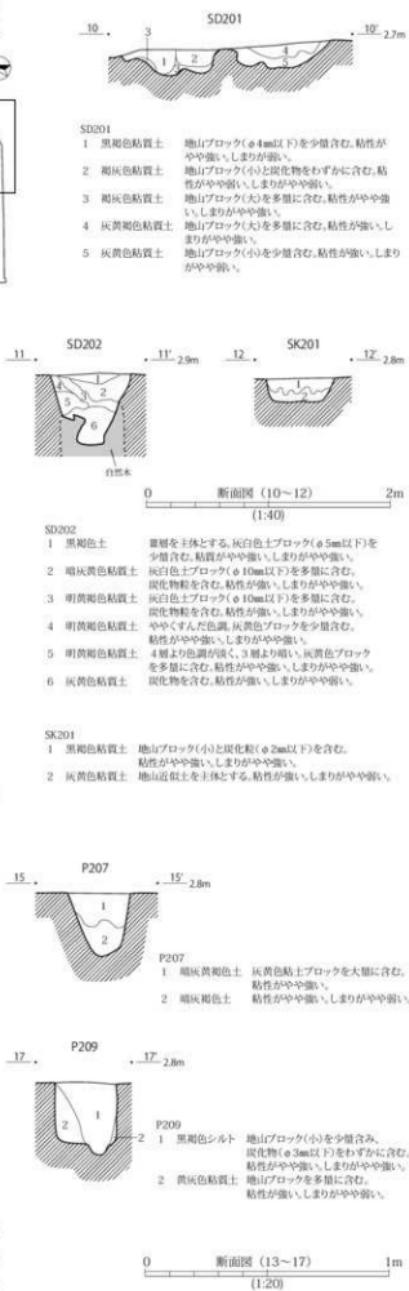
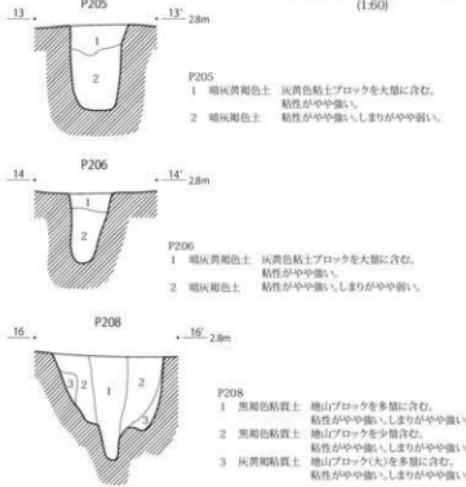
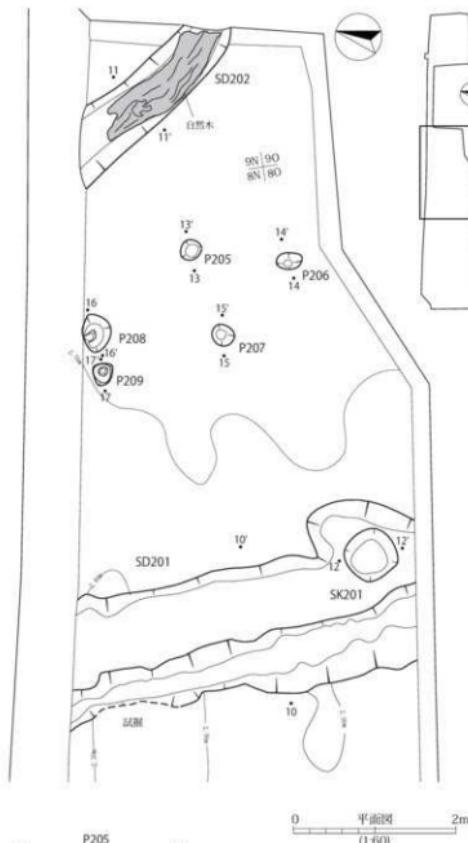




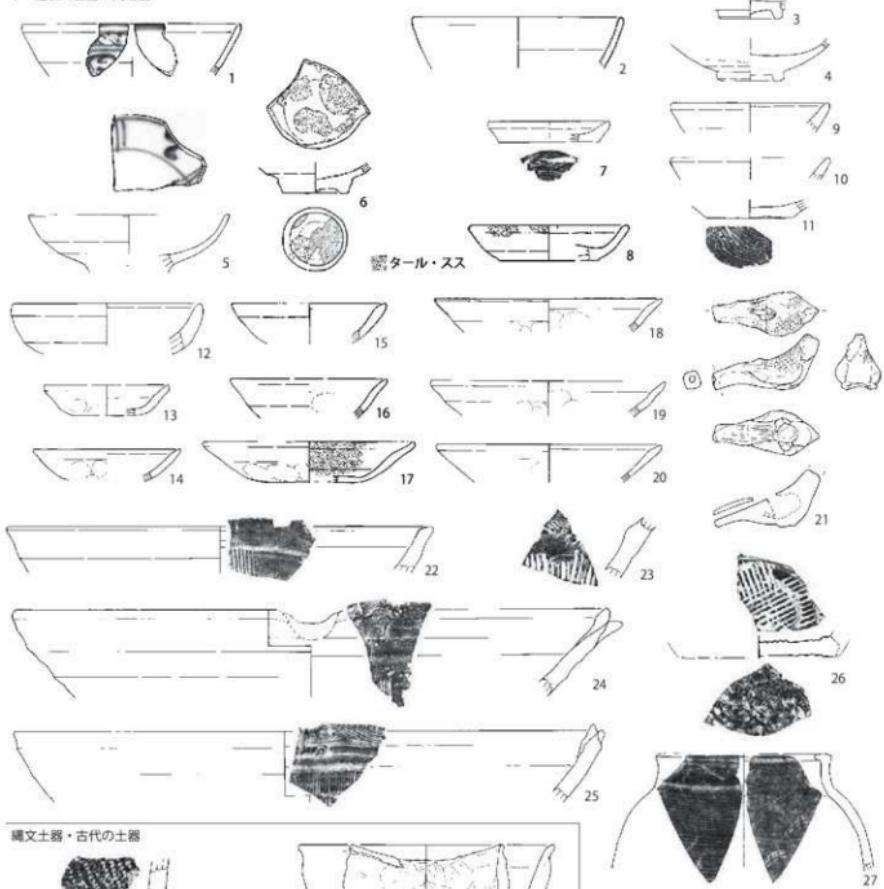


構造分割図 (1)

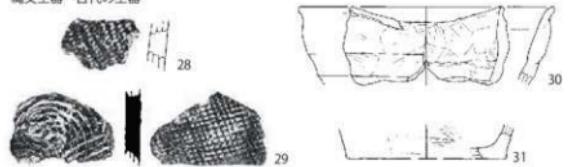




中・近世の土器・陶磁器



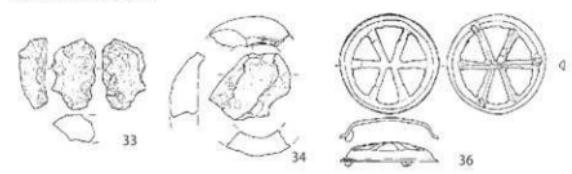
縄文土器・古代の土器



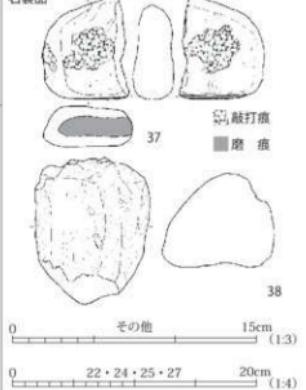
木製品



鎌治関連遺物・金属製品



石製品





遺跡遠景（南西から柏崎市街地を望む）矢印の交点が調査区の位置



調査区全景（北・鉛直から）



遺跡遠景（西から）



遺跡遠景（東から）



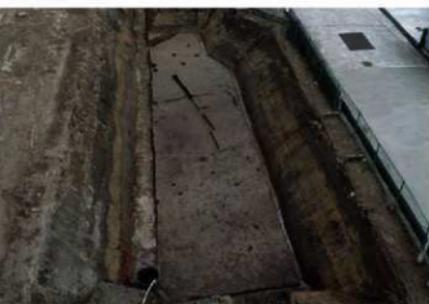
基本層序 (10N グリッド G 地点・南から)



基本層序 (7N グリッド D 地点・南から)



完掘（調査区東半・北西から）



完掘（調査区西半・西から）



掘立柱建物 SB201 完掘（南から）



金属製香炉蓋 (36) 出土状況（北から）



掘立柱建物 SB201 完掘（西から）



P201 碕盤（板）検出状況（北から）



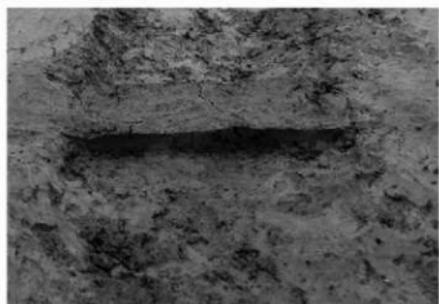
P208 セクション（北から）



P208 完掘（北から）



P205 完掘（南から）



SX201 セクション（西から）



SK201 セクション（西から）



SK201 完掘（西から）



SD201 上層完掘 (南から)



SD201 北壁セクション (南から)



SD201 上層セクション (南から)



SD201 下層セクション (南から)



SD201 下層・SK201 完掘 (南から)



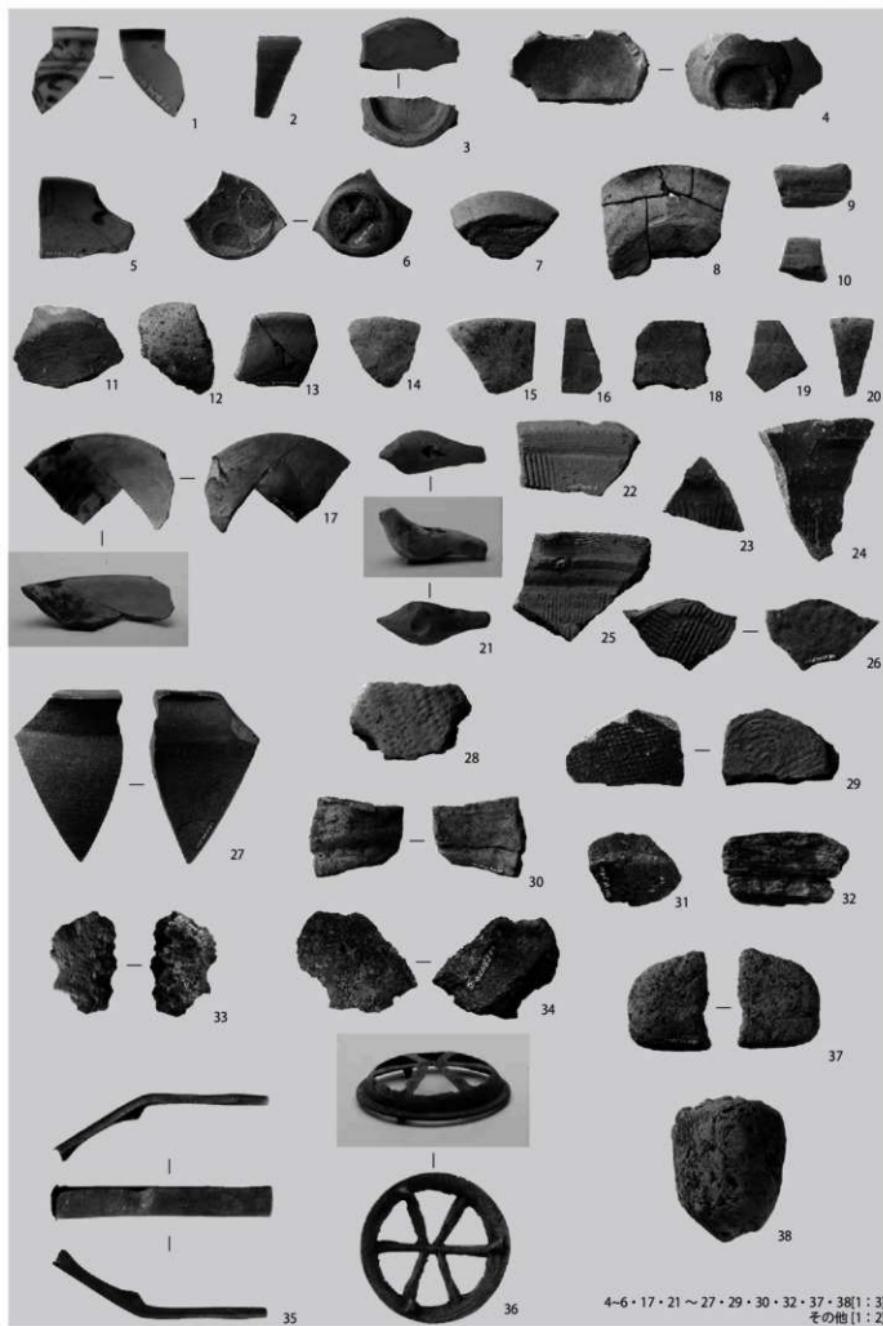
SD202 北壁セクション (南から)



SD202 セクション (北西から)



SD202 完掘 (北西から)



4~6・17・21~27・29・30・32・37・38[1:3]
その他[1:2]

報告書抄録

ふりがな	ちごづくりいせきに							
書名	千古作遺跡II							
副署名	一般国道8号柏崎バイパス関係発掘調査報告書							
卷次	V							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第234集							
編著者名	相羽重徳（株式会社古田組）、田海義正（新潟県埋蔵文化財調査事業団）							
編集機関	財团法人新潟県埋蔵文化財調査事業団・株式会社古田組							
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒949-3241 新潟県上越市柿崎区百木750番地 TEL 025 (536) 2721 株式会社 古田組							
発行年月日	2012(平成24)年3月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經 ° ° ° °	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
ちごづくりいせき 千古作遺跡	新潟県柏崎市大字 剣野町字千古作 288-3ほか	15205	721	37度 20分 54秒	138度 33分 3秒	2011.04.11 ～ 2011.04.26	331 m ²	一般国道8号 柏崎バイパス 建設
所収遺跡	種別	時期	主な遺構	主な遺物		特記事項		
千古作遺跡	集落	中世(14世紀 後半～16世紀)	掘立柱建物・溝 ・土坑・性格不明遺構・柱穴	青花、青磁、白磁、珠洲焼、越前焼、備前焼、漆器(椀)、鍛冶関連遺物(鉄淨・羽口)、銅製品(刀子柄・香炉蓋)、石器・石製品(磨石・軽石)、繩文土器、須恵器、製塙土器	2008年度に続き 2回目の調査である。 新たに掘立柱建物を 検出し、水田や井戸 を伴う中世集落の様 相が復元できる。	2008年度に続き 2回目の調査である。 新たに掘立柱建物を 検出し、水田や井戸 を伴う中世集落の様 相が復元できる。		

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第234集	
一般国道8号柏崎バイパス関係発掘調査報告書V	
千古作遺跡 II	
2012年3月29日印刷 2012年3月30日発行	編集・発行 新潟県教育委員会 〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1 電話 025(285)5511 財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1 電話 025(25)3981 FAX 025(25)3986
印刷・製本	株式会社ハイアングラフ 〒950-2022 新潟市西区小針1丁目 11番8号 電話 025(233)0321